

福井県埋蔵文化財調査報告 第152集

糞置遺跡

— 主要地方道清水美山線道路改良工事に伴う調査 —

2 0 1 4

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、主要地方道清水美山線道路改良工事に伴って福井市半田町地係において、平成21年度に発掘を実施しました糞置遺跡の調査成果がまとまり、報告書を刊行することとなりました。

糞置遺跡は福井市の南部、越前五山の一つである文殊山の北麓に立地し、奈良時代には東大寺領糞置荘が置かれた荘園遺跡として知られていますが、北陸自動車道建設の際の発掘調査により、土坑墓を中心とする弥生時代の集落遺跡でもあることが判明し、以来、周辺地域において数度の発掘調査が行われてきました。

この度の調査地は、遺跡の北端部にあたることから、遺構・遺物は限定的ではありましたが、糞置遺跡に関する新たな資料を得ることができました。

今後、この調査の成果が広く公開、活用され、埋蔵文化財に対する理解をより一層深めていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

平成26年 3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 畠 中 清 隆

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、主要地方道清水美山線道路改良工事に伴い、平成21年度に実施した糞置遺跡（福井県福井市半田町^{はんだちょう}所在）の発掘調査報告書である。
- 2 糞置遺跡の調査は、福井県福井土木事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、野路昌嗣、土谷崇夫、池原悠貴が担当した。
- 3 発掘調査は、平成21年10月6日から平成21年12月25日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成22年4月1日から平成26年3月18日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の執筆・編集は野路が担当した。
- 5 本遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 検出遺構の図化は土谷・池原が、写真撮影は野路が、出土遺物の図化・図版作成は杉山大晋、野路が、遺物の写真撮影は野路が行った。
- 7 本書に掲載した遺構全体図は、株式会社平和ITCに委託して作成したものを一部改変して使用した。また、上空からの写真は、航空測量時に株式会社イビソクが撮影したものである。なお、調査地の基準点測量・グリッド杭の設置は、株式会社第一コンサルに委託した。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は、海拔高（m）を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は世界測地系第IV系に基づく。
- 10 断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編 新版『標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に依る。
- 11 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

凡 例

- 1 本書で用いた遺構記号は、以下のとおりである。
土坑：SK 溝：SD ピット：SP 井戸：SE
- 2 第1・3表の胎土は次の8種類に分けた。
①微砂粒（径1mm以下）を少量含む。②微砂粒を多量含む。③微砂粒と砂粒（径1～2mm）を少量含む。④微砂粒と砂粒を多量含む。⑤砂粒を少量含む。⑥砂粒を多量含む。⑦やや粗い砂粒（径2mm以上）を少量含む。⑧やや粗い砂粒を多量含む。

目 次

第1章	調査に至る経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第2章	遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	4
第3章	遺跡の概要	5
第1節	層序	5
第2節	遺構と遺物の分布状況	6
第4章	遺構	9
第1節	弥生時代の遺構	9
第2節	その他の時代の遺構	14
第5章	遺物	17
第1節	弥生時代の遺物	17
第2節	その他の時代の遺物	20
第6章	まとめ	25
第1節	遺跡	25
第2節	土器	25

写真図版目次

図版第1	遺跡・遺構		
	(1)	遺跡遠景	
	(2)	SD01	
	(3)	SD08	
図版第2	遺構	(1)	SD05
		(2)	SK01
		(3)	SK03
		(4)	SK06・07
		(5)	SK08
		(6)	SK03土器出土状況
図版第3	遺物		
図版第4	遺物		

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図	2	第9図	遺構図4	15
第2図	遺跡周辺の地形図	3	第10図	遺構図5	16
第3図	周辺の遺跡分布図	4	第11図	遺構出土土器実測図1	19
第4図	土層模式図	5	第12図	遺構出土土器実測図2	21
第5図	遺構全体図	7・8	第13図	包含層出土土器実測図	21
第6図	遺構図1	10	第14図	石器実測図	22
第7図	遺構図2	11	第15図	その他の出土遺物実測図	22
第8図	遺構図3	13			

表 目 次

第1表	弥生土器観察表	23
第2表	石器観察表	24
第3表	その他の時期の遺物観察表	24
第4表	金属器・銭貨・石製品観察表	24

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

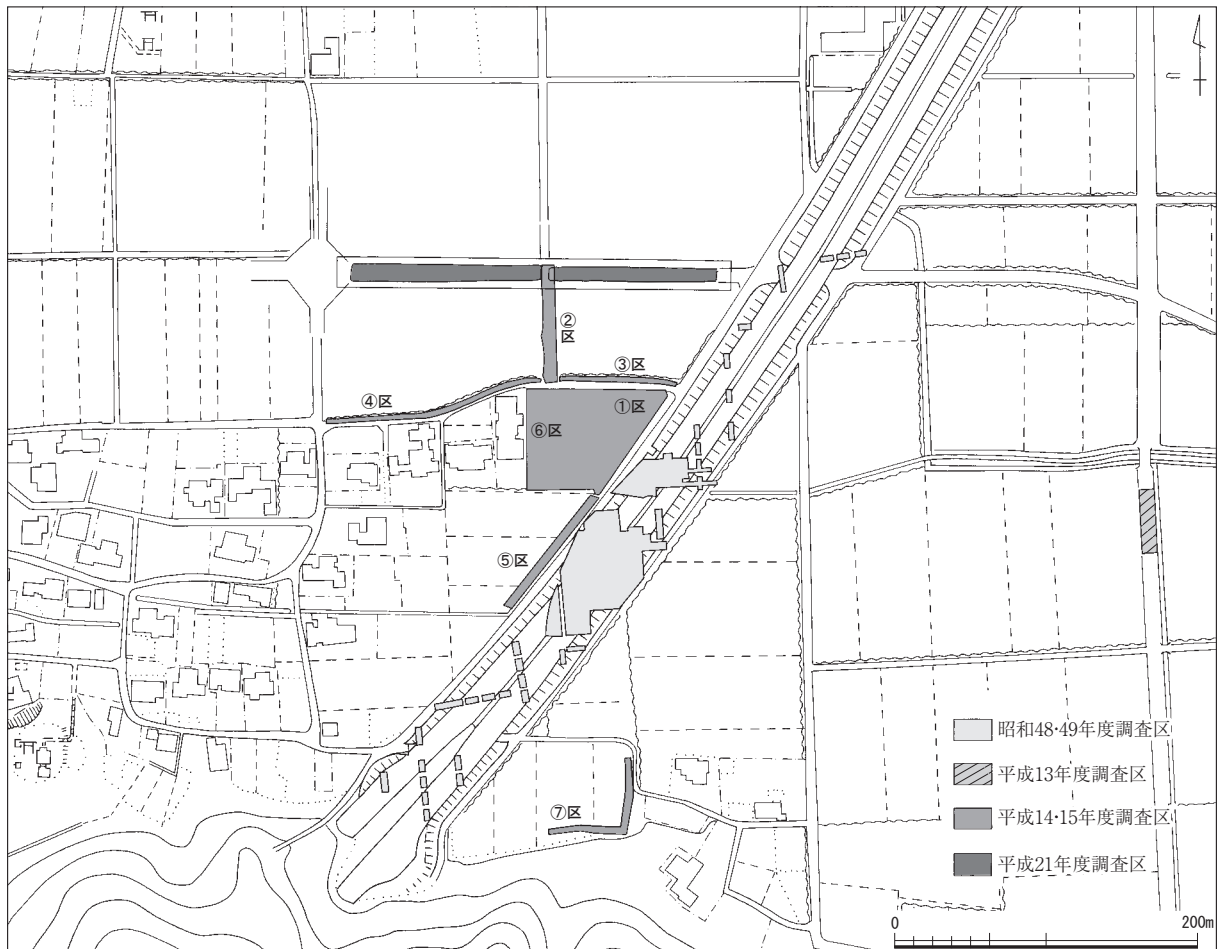
糞置遺跡の位置する福井市半田町^{はんだちょう}は、集落の東方に北陸自動車道が、西方にJ R北陸本線が南北に走っている。さらに西方に隣接する大土呂町^{おどろちょう}、今市町^{いまいちちょう}には国道8号、福井鉄道福武線、旧国道8号が近接して走り、嶺北地方の北部と南部を結ぶ交通の要地である。この地を東西に走る主要地方道清水美山線は、福井市西部から市南部を横断し、福井市東部の国道158号へ至り、福井市に編入合併された旧清水町^{しみずちょう}と旧美山町^{みやまちちょう}を最短で結ぶ路線である。しかし、当該区間はJ R北陸本線の踏切部（半田踏切）において通勤時間帯の渋滞が著しく、また、J R大土呂駅前には特に幅員狭小・線形不良であるため、普通自動車のすれ違いが困難であった。このため、安全で円滑な交通の確保、および合併市町間の交流促進を図ることを目的に、福井土木事務所（以下、福井土木と略）において、踏切の立体交差化を含むバイパスを整備する「主要地方道清水美山線道路改良工事」が計画された。

今回の福井土木の工事計画範囲は、福井県遺跡地図に記載され、周知の遺跡である糞置遺跡の範囲に含まれている。半田町を含む文殊山北麓^{もんじゅざん}には、奈良時代に東大寺領荘園糞置荘が設置され、正倉院に伝わる8世紀に描かれた2枚の絵図は、現在の景観と一致し荘域が比定可能なことで著名である。糞置遺跡は、昭和48・49年に北陸自動車道建設に伴い福井県教育委員会が、また最近では平成13年度に農道整備、平成14・15年度には圃場整備に伴う発掘調査が福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文センターと略）によって行われ、豊富な遺構・遺物が確認されている（第1図）。そのため、今回の道路改良工事にあたり、福井土木から県埋文センターに、工事に伴う埋蔵文化財の試掘調査依頼が提出された。今回の工事計画範囲の中には、県営圃場整備事業に伴い、県埋文センターが平成13～15年度に亘って広く試掘調査を実施した半田集落北西の水田域が含まれており、本格調査の必要のない範囲があることが把握されていた。そのため県埋文センターは、試掘調査範囲を今回新設する県道が、市道と交差する東側に限定し、平成21年8月5日に試掘調査を行った。試掘調査の結果、主に弥生時代中期の遺構・遺物を確認し、県埋文センターは工事予定範囲の2,300㎡が発掘調査の対象となる旨を福井土木に回答した。これを受けて福井土木は県教育庁文化課と協議を行い、平成21年度内に県埋文センターが発掘調査を実施することで合意した。

第2節 調査の経過

調査区は東西約240m、南北は9～12mを測る。調査区西端は、市道との交差点となり右折レーンが設けられる計画のため、他所よりやや幅が広がる。総面積は2,300㎡である。調査前は砂利敷の農道であったが、かつては水田および水路など幾度かの改変があったようである。そのため、重機により路面の敷砂利を除去後、さらに旧耕作土の除去を行った。

調査にあたり、新設する道路の中心線を基準として、東西方向に10m間隔で杭を設置し、南北をA・B列、東西を1～26列とした10m×10mのグリッドを設定した。その内、調査区外にあたる1区と26区は廃土置き場として使用することとした。また、13区は平成14年度調査区の②区にあたり、現況は農道となっている。そのため、南北方向の農道により調査区が東西に分断される形になっている。表土剥ぎは9月28・29日に東西の全調査区を一度に行った。そして10月初めにプレハブ等器材の搬入を行い、10



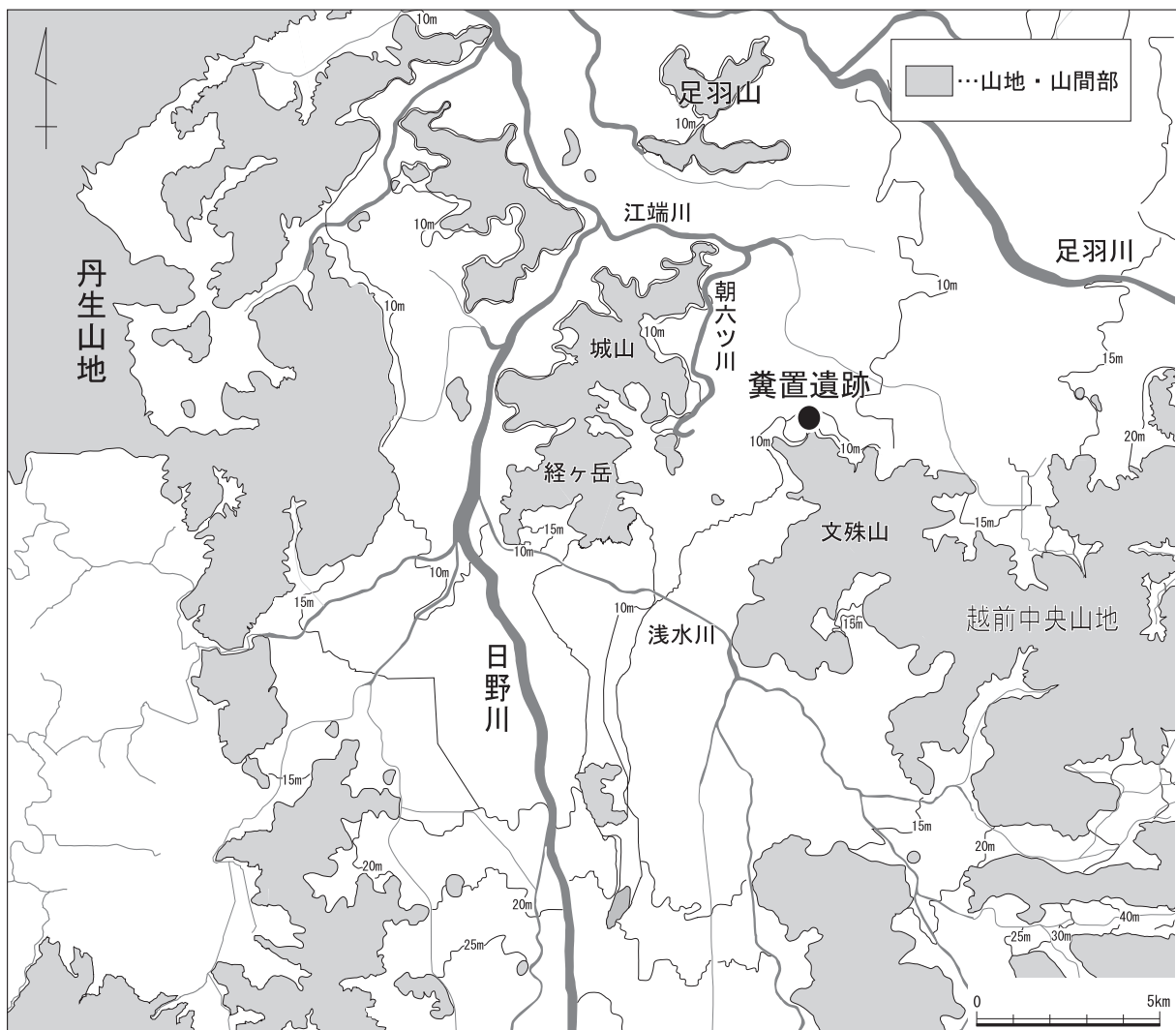
第1図 調査区位置図(縮尺1/5,000)

月6日から作業員を配置して東側からの掘削作業に着手した。グリッド杭は10月13日に設置した。作業は南北方向に幅約50cmのトレンチを任意の間隔で設定していき、遺構確認面である黄褐色土面を確認し、順次掘削範囲を拡張していった。後世の削平および耕作により、全体を通して弥生時代の遺物包含層はほとんど残存しておらず、近世の耕作土と考えられた灰色土が10cm程度の厚さで堆積していた。調査開始期の調査区東側においては、灰色土を除去し、遺構確認面を検出すると、灰色土が覆土となる幾筋もの溝状のプランが現れた。当初は弥生時代の遺構は少なく、近世の畑作痕と考えられるこれらの溝を掘削していき、10月下旬から11月上旬にかけて弥生時代の溝を掘削した。東側の遺構掘削をほぼ終えた11月6日に、発電機・ベルトコンベアー等の器材を西側に移動し、以後、西側調査区の作業を開始することとなった。西側調査区では、試掘調査により弥生時代の遺構が増えることが想定された。畝状遺構掘削は調査区東側のみとし、畝状遺構の間から垣間見える暗褐色～黒褐色土の遺構を掘削することとした。11月下旬には、遺構の掘削と写真撮影を行った。幸い、冬に向かう時期でありながら天候に恵まれたこともあり、12月9日に全景写真を撮影し、翌10日に空中写真測量を行った。その後は降雪により、作業は断続的となりながらも、下層確認のための掘削を行った後、撤収作業を行い、12月25日に発掘作業を終了した。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

糞置遺跡は、福井平野の南端、鯖江市との市境を東西に連なる標高365mの文殊山北麓に位置する。福井平野は、西方の丹生山地と東方の両白山地の間が沈降し、竹田川、九頭竜川、足羽川、日野川などの堆積作用によって形成された沖積平野である。狭義の福井平野の南端は、東の越前中央山地から西に延びる文殊山と、西の丹生山地との間に位置する城山、経ヶ岳などの独立丘陵により狭められ、これを境に鯖江市、越前市の立地する南越盆地へと通じている。当地を流れる河川には、浅水川、江端川、高橋川などの中小河川があるが、東方からの足羽川が形成する足羽扇状地が広がることにより、これら河川は流れを西方へ押しやられ、城山の西端をまわり丹生山地沿いに流れを変える日野川に合流する。そのため、福井平野や南越盆地境には、蛇行して流れるこれら諸河川により自然堤防や後背湿地が形成され、洪水の際には水に浸かりやすい地域であった。糞置遺跡の周辺は特に日野川、足羽川の沖積作用の影響が大きく、南越盆地から連続して形成された扇状地の末端にあたる。なお、浅水川は経ヶ岳南麓を西流して日野川へ合流するように改修され、旧来の流路は現在、朝六ツ川となつている。



第2図 遺跡周辺の地形図(縮尺1/200,000)

第2節 歴史的環境（第3図）

糞置遺跡の位置する福井平野南部には多くの遺跡が存在し、北陸自動車道建設事業をはじめ、多くの発掘調査が行われている。以下に、糞置遺跡の近辺で行われた主な発掘調査を紹介する。

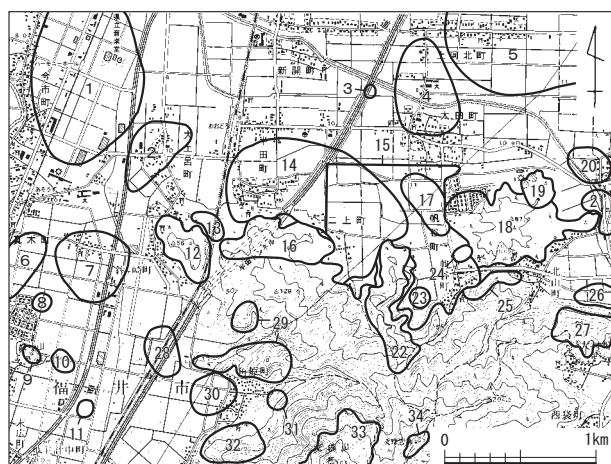
^{つづみやま}**鼓山古墳群**（9） 昭和38年に福井市教育委員会が調査を行った。福井市南端の独立丘陵上に位置する。4世紀末から5世紀初頭の陪塚を伴う前方後円墳である。前方後円墳の埋葬施設は全面に朱が敷かれ、槍先、剣、鎧鉾、鞍などが副葬されていた。陪塚には仿製鏡、剣が副葬されていた。

^{さんじゅうはっしや}**三十八社遺跡** 図にはないが、糞置遺跡の南西約3kmの経ヶ岳裾部に位置する。昭和44年に帝塚山大学がトレンチ調査を行った。縄文時代前期から後期にかけての土器が出土している。

^{おおたやま}**太田山古墳群**（18） 北陸自動車道建設の土取り工事に伴い、昭和49年に福井県教育委員会が調査を行った。弥生時代中期から古墳時代前期にかけての方形台状墓2基、方形周溝墓7基が発掘調査された。方形台状墓の2号墓主体部は朱が施され、501点の管玉が副葬されていた。

^{かみあやうだ}**上筋生田遺跡** 図にはないが、糞置遺跡の北東約1.8kmに位置する。北陸自動車道建設に伴い、昭和49・50年に福井県教育委員会が調査を行った。弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の円形周溝状遺構の他、奈良・平安時代の掘立柱建物、井戸などがある。旧河道からは墨書土器が出土した。なお、調査時は^{かみこぎた}上河北遺跡と呼称されていたが、その後、周辺の調査が進み、遺跡が上筋生田地籍に及ぶことが判明したため、上筋生田遺跡と変更された。

^{あほやま}**安保山古墳群** 図にはないが、糞置遺跡の西約2kmに位置する。昭和50年に福井県教育委員会が調査を行った。前方後円墳2基、前方後方墳1基、円墳2基の他、炉跡、竪穴住居がある。



- 1 今市遺跡 2 大土呂遺跡 3 下河北・藤ノ木遺跡 4 太田遺跡 5 上河北遺跡
6 真木遺跡 7 主計中今村遺跡 8 浅水二日町谷山遺跡 9 鼓山古墳群
10 末広・下町遺跡 11 森行・青田遺跡 12 鉦ヶ崎古墳群 13 鉦ヶ崎遺跡
14 糞置遺跡 15 東大寺領糞置荘 16 二上・半田古墳群 17 帆谷遺跡
18 太田山古墳群 19 牛若城遺跡 20 徳光大鳥遺跡 21 北山入道町遺跡
22 二上古墳群 23 帆谷谷田遺跡 24 帆谷西ノ坊遺跡 25 北山横穴墓群
26 北山遺跡 27 大宅山古墳群 28 角原老文字遺跡 29 角原古墳群
30 角原中町遺跡 31 角原遺跡 32 生野古墳群 33 文珠山城 34 文珠山古墳

第3図 周辺の遺跡分布図(縮尺1/50,000)

^{いまいちいわはた}**今市岩畑遺跡**（1） 県立音楽堂建設に伴い、平成5年に県埋文センターが調査を行った。縄文時代では、明確な包含層・遺構は確認出来なかったものの、後期末から晩期前葉に位置付けられる土器がトレンチから出土している。弥生時代中期の遺構には、環濠・井戸・土坑があり、玉作関連遺物が出土した。また、弥生時代後期を除く、中期から古墳時代前期にかけては墓域であり、墳丘・埋葬施設は削平されていたが、方形周溝墓・古墳を13基確認した。奈良時代では、住居・倉庫と考えられる掘立柱建物を確認した。主に7世紀末から8世紀末までの遺物が出土しており、須恵器の他、畿内系の暗文・赤彩土器がある。土器以外では、斎串・馬形などの木製祭祀具、牛馬骨が溝から出土している。

^{おおどろ}**大土呂遺跡**（2） 平成5年、県埋文センターが調査を行った。調査区の北側と南側で様相が異なり、北側は弥生時代終末から古墳時代初頭の集落、南側は奈良から平安時代の集落である。

第3章 遺跡の概要

第1節 層序

糞置遺跡は、福井市半田町の北に広がる水田域に位置する。遺構確認面の標高は8.4~8.6mを測り、非常に緩やかではあるが、地形は徐々に西方へ傾斜している。調査区は、調査前は農道であったが、農道敷設以前は耕作地や水路など幾度かの改変が行われている。特に近世以降の耕作および削平により、弥生時代の包含層の残存状況は良好ではなかった。主に調査区西側で弥生時代の包含層を確認することが出来たが、近世の畝状遺構に切られて、モザイク状を呈す様相であった。層位の観察は、調査区南側の水田との境の壁面にて行った。東西に長い調査区であるが、層序はおおむね共通している。以下に概略を述べる（第4図）。

I層は、表土であり、現代の水田耕作土である。層厚は10~30cmを測る。

II層は、近代以降の旧水田耕作土や造成土である。層厚は10~30cmを測る。

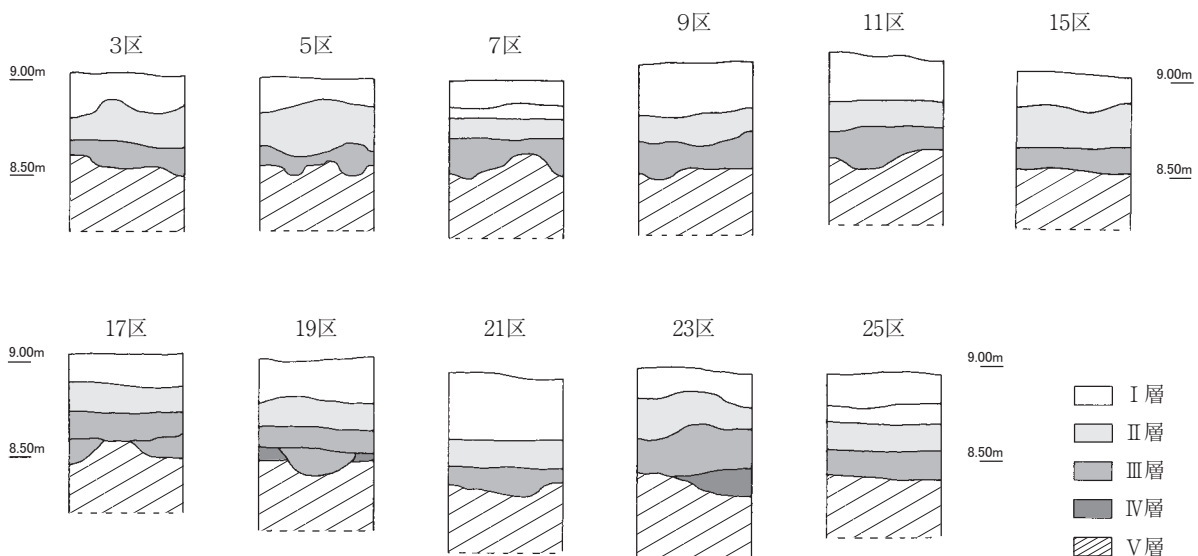
III層は、暗灰黄色粘質土~褐灰色粘質土からなる層である。層厚は5~20cmを測り、一定していない。各時代の遺物を含む包含層である。この層は近世の畑作に伴う耕作土であり、後述する畝状遺構の覆土となる。

IV層は、灰黄褐色~黒褐色粘質土からなる層である。部分的にしか残存しておらず、層厚は10cm以下を測る。弥生時代中期の土器を含む包含層である。

V層は、オリーブ褐色粘質土~黄褐色粘質土からなる層である。遺構確認面である。調査においてはこの層の上面を確認し、遺構の検出作業を行った。東方は粘性がやや弱いものの、西方にかけては次第に粘性が強くなる。

以上の5層に分層することができる。

また、調査区の周囲に設けた排水溝や、遺構からは湧水がみられ、地下水位は比較的高いと言えよう。しかし、鉄分が多く含まれるためか赤味を帯びており、出土した土器にも付着している状況であった。



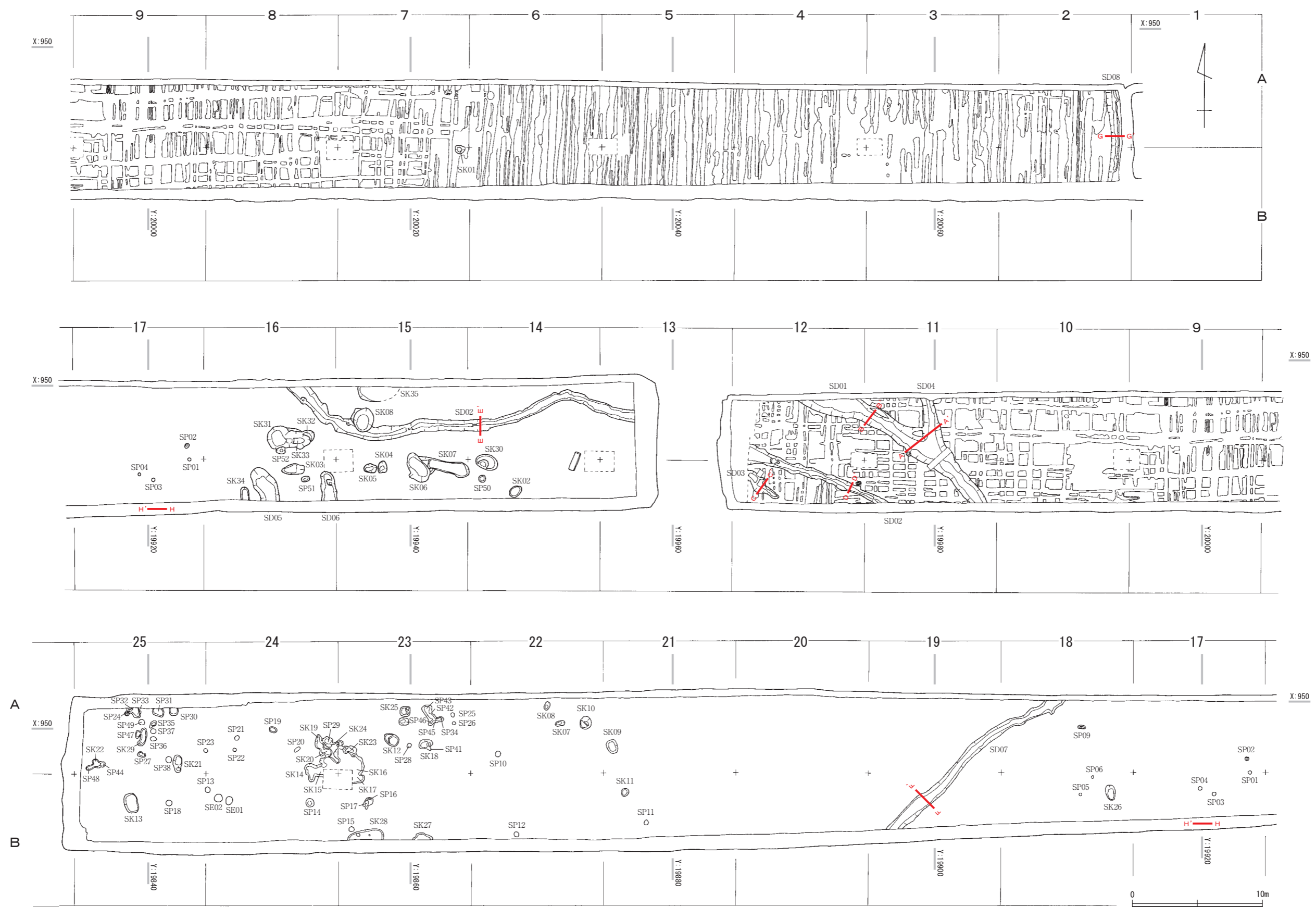
第4図 土層模式図(縮尺1/40)

第2節 遺構と遺物の分布状況

今回の調査で確認した遺構には、溝（SD）8条、井戸（SE）2基、土坑（SK）36基、ピット（SP）約50基の他に、畑作に伴う畝状遺構がある。覆土の違いから遺構の時期を判断できるが、弥生時代と近世以外の遺構は確認していない。

弥生時代の遺構は、調査区が東西に分割される、平成14年度調査区の②区付近（第1図）に集中している。遺構が集中する範囲は、おおよそ11区を東端とし、19区を西端とする。11区以東には、2区で溝が1条、B7区で土坑が1基存在するのみで、極めて遺構密度が低い。19区以西には、遺構が空白となる20区を挟んで土坑・ピットが多数存在する。しかし、21区以西で確認した土坑・ピットは総じて浅く、平面形が不整形を呈するものが多い。遺物を伴う遺構も極めて少なく、遺構の性格として明確なものはない。それに対し、11～19区間の遺構は、深く掘り込まれ、土坑の中には規模や出土遺物から土坑墓と考えられるものがある。この遺構が集中する範囲を取り囲むように、11・19区には弧状に延びる溝が走るため、この東西の溝の間が、過去の調査と関連する集落域と考える。21区以西で確認した多くのピットは、規則的に並ぶものや、土層観察から柱穴と言えるものはなく、建物を構成しない。近世の遺構で性格が判明するもの、または遺物が出土したものは、調査区の西方に集中し、B24区で確認した2基の井戸とB23区のピット（SP15）がある。2基の井戸は近接して構築されており、共に内部構造物を持たない素掘り井戸である。この井戸は耕作における灌漑用の簡易な井戸と考えている。B23・24区以外では耕作痕である畝上遺構が確認できるのみである。調査の経過でも述べたが、畝状遺構については時間的な制約から、東側調査区のみ掘削を行った。東側調査区よりも密度は低いが、西側調査区にも畝状遺構は展開する。

遺物には、弥生土器・須恵器・陶磁器・石器・石製品・銭貨・金属器がある。包含層・遺構とも出土量は少ない。Ⅲ層は近世の耕作土という性格のため、弥生時代・律令期・中世・近世の各時期の遺物が混在しており、小片が多い。Ⅳ層は部分的にしか存在しないため、比較的残存する西側調査区からの出土が中心である。遺構出土遺物には、溝および土坑墓と考えられる遺構から、甕・壺など一定量の遺物が出土している。また、今回の調査では遺構を確認していない律令期や中世の遺物が包含層から少量出土しているが、平成14・15年度調査区では、これらの時期の遺構を確認していることから、本調査区近辺での律令期および中世の集落の広がりを窺わせる。



第5図 遺構全体図(縮尺1/300)

第4章 遺構

第1節 弥生時代の遺構

1 溝

SD01 (第6図)

AB11・12区に位置する。A11区内でSD04が分岐する。確認長9.50m、幅1.15～1.60m、深さ0.35～0.46mを測る。断面は半円状を呈し、南東から弧を描いて北西方向へ延びるが、底面のレベルは一定せず、SD04との合流付近が最も深い。部分的に高低差があるため、流路の方向は判断しがたい。幅は北西に向かうにつれ幅広となる。覆土は、上～中層の黒色土の下層にしまりの強い褐色土が堆積している。底面からの壁の立ち上がりは緩やかで、自然流路と考えられる。A11・12区内の底面付近から、弥生時代中期の土器が出土している。

SD02 (第6・8図)

B11～A16区にかけて位置する。平成14年度調査の②区SD-40と同一の溝である。今回、東側の調査区で10.50m、西側の調査区で27.50mを確認した。幅は畝状遺構と切り合い一定しないが、西側の北西端で最大幅1.30m、深さは東側では0.12～0.18mを、西側では0.19～0.21mを測る。断面は半円状を呈し、南東方向から直線的に延び、A14区で西方向に強く折れ、15区で緩く屈曲し、北西方向へ向きを変える。A15区でSK08を切っている。弥生時代中期の土器が出土している。

SD03 (第6図)

B12区に位置する。確認長2.55m、幅は畝状遺構との切り合いで一定しないが、最大で1.20m、深さ0.16～0.22mを測る。断面は浅皿状を呈す。北西方向に延びているが、平成14年度の調査でもこれに該当する溝がないことから、調査区境で西端部になると考えられる。覆土は黒色土を主体とし、弥生時代中期の土器が出土している。

SD04 (第6図)

A11区に位置する。SD01から分岐する。最大幅1.30m、深さ0.14～0.34mを測る。断面は半円状を呈し、北方向へ延びる。土層観察からSD01との切り合いは認められなかった。遺物は出土していない。

SD05 (第6図)

B16区に位置する。南側は調査区外に続く。確認長2.55m、最大幅1.65m、深さ0.27mを測る。断面は浅皿状を呈す。南北方向に延びるが、北端は北西方向へ折れる。覆土は黒褐色粘質土が主体となる。覆土上層から弥生時代後期の土器が少量出土し、下層からは弥生時代中期の土器がまとまって出土している。東側の肩部からは、柱状片刃石斧が底面より5～7cm浮いた状態で、また、砥石の欠損品が土器片中から出土している。

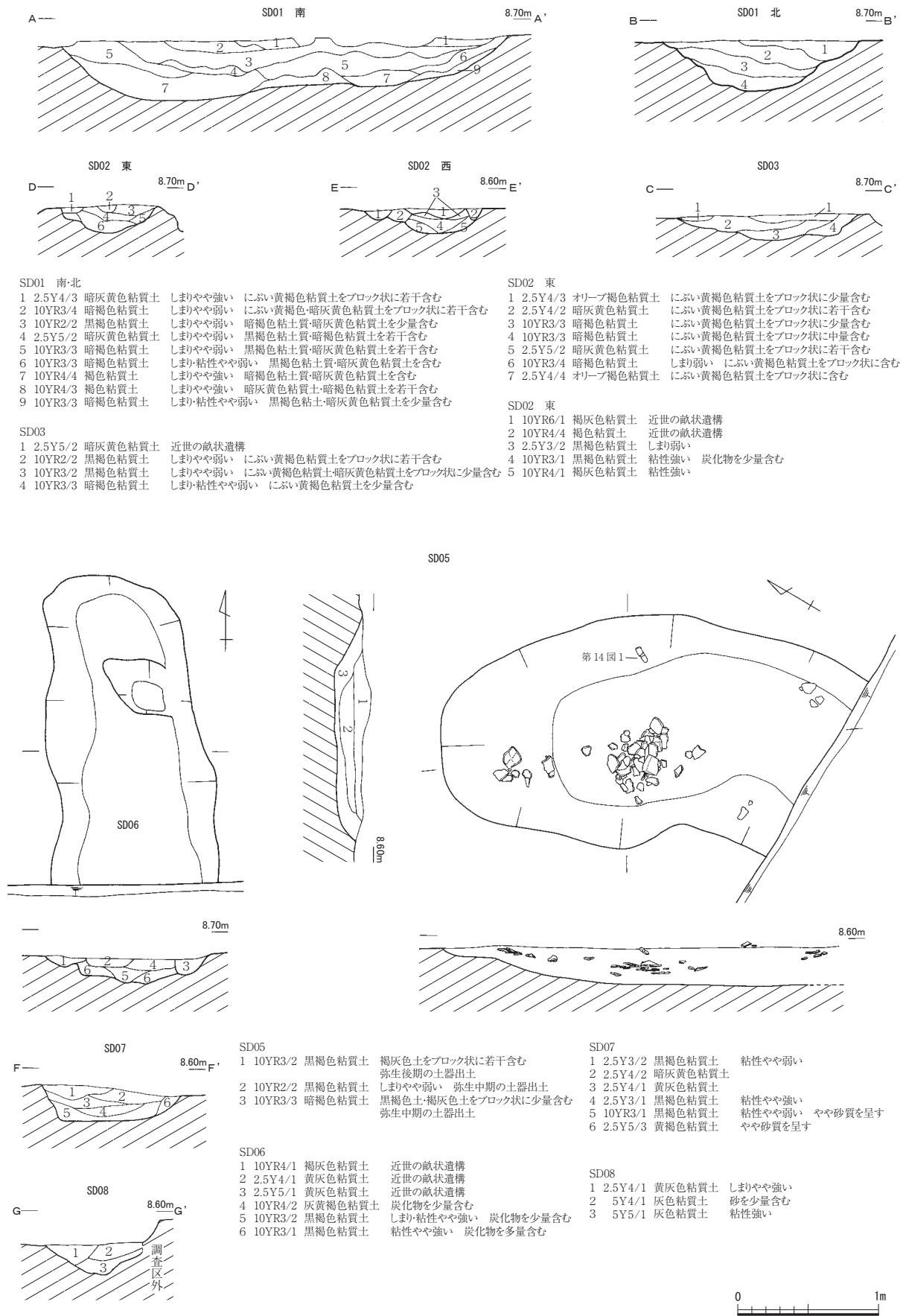
SD06 (第6図)

B16区に位置する。南側は調査区外に続く。確認長2.20m、最大幅1.20m、深さ0.20mを測る。断面は浅皿状を呈す。南北方向に延びる。弥生時代中期の土器が出土している。

SD07 (第6図)

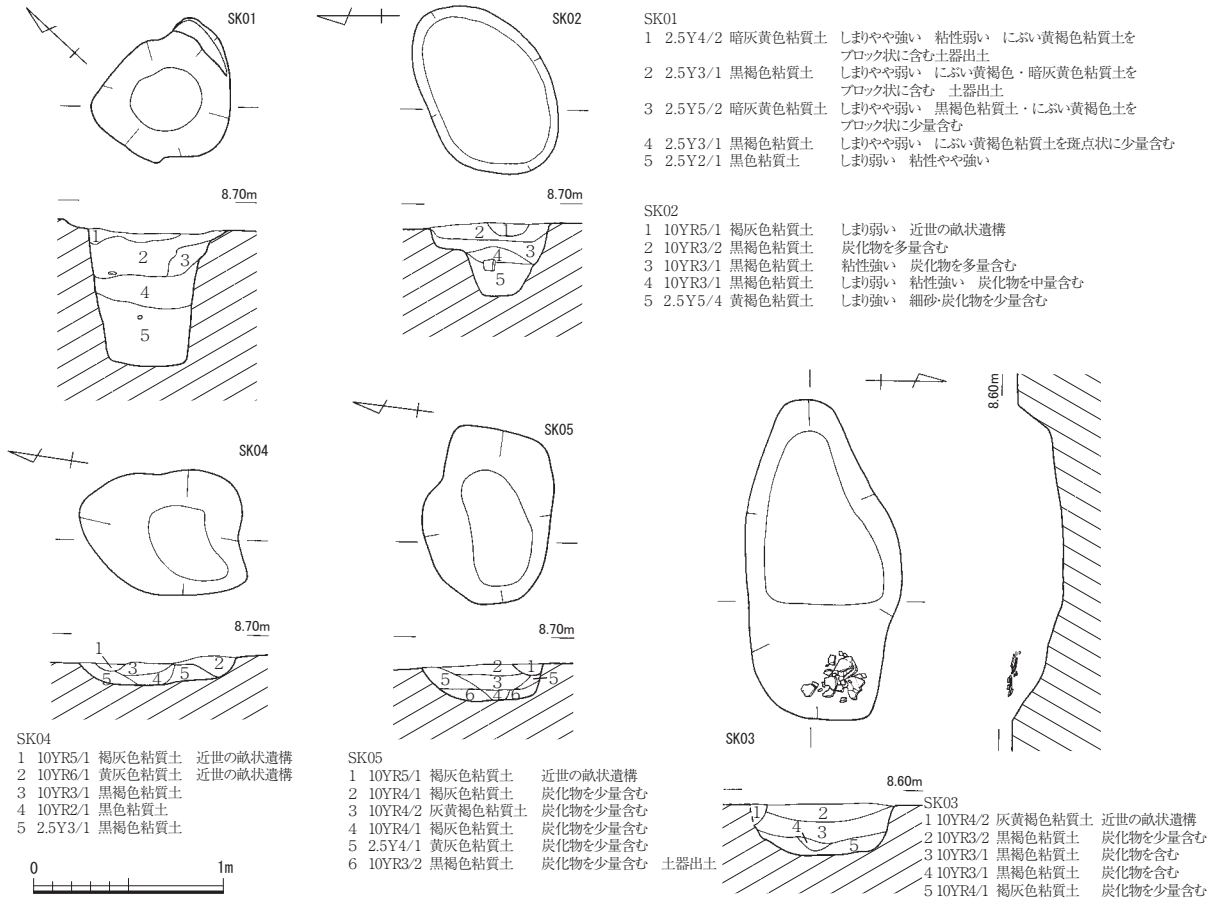
A18～B19区に位置する。確認長15.70m、最大幅1.10m、深さ0.11～0.33mを測る。断面形は半円形を呈す。弧を描き、北東方向から南東方向に延びる。弥生時代後期前半の土器が少量出土している。

第4章 遺構



第6図 遺構図1 (縮尺1/40)

第1節 弥生時代の遺構



第7図 遺構図2 (縮尺1/40)

SD08 (第6図)

AB 2区に位置する。確認長6.90m、確認幅は0.90~0.75m、深さは0.27mを測り、断面は凸型を呈す。南北方向にやや弧を描くようにのびる。壁の中ほどに段を有し、覆土は灰色粘質土を主体とする。底面付近から弥生時代中期の土器が少量出土している。

2 土坑

土坑は34基を検出した。遺物を伴うものは総じて少なく、その分布範囲は西側調査区の東方よりにまとまる。さらに西側に位置する土坑は、浅いものが多く散在する。

SK01 (第7図)

AB 7区に位置する。長軸0.75m、短軸0.67m、深さ0.77mを測り、平面不整形円形を呈す。平坦な底面から壁が立ち上がり、やや外方に開く。覆土は黒色粘質土が主体となる。井戸の可能性はある。覆土中層から弥生時代後期の土器が少量出土している。

SK02 (第7図)

B 14区に位置する。長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.22mを測り、平面楕円形を呈す。底面から段を有す壁が上方に立ち上がる。覆土は炭化物を含む黒褐色土が主体となる。弥生時代中期の土器が少量出土している。

SK03 (第7図)

B 16区に位置する。長軸1.70m、短軸0.82m、深さ0.26mを測り、平面不整形楕円形を呈す。ほぼ平坦な底面から東側の壁は緩やかな段状を呈し、西側の壁は明瞭に立ち上がる。覆土は炭化物を含む黒褐色

土が主体となる。弥生時代中期の土器が遺構上面からまとまって出土している。

SK04 (第7図)

B15区に位置する。長軸0.87m、短軸0.66m、深さ0.17mを測り、平面不整円形を呈す。断面は浅皿状を呈す。覆土は黒褐色土が主体となる。弥生時代中期の土器が出土している。

SK05 (第7図)

B15区に位置する。長軸0.95m、短軸0.70m、深さ0.21mを測り、平面不整長方形を呈す。断面は逆台形状を呈す。弥生時代中期の土器が出土している。

SK06 (第8図)

B15区に位置する。SK07を切っている。長軸2.23m、短軸1.50m、深さ0.51mを測り、平面長楕円形を呈す。ほぼ平坦な底面から壁は上方に開くように立ち上がり、断面は逆台形状を呈す。覆土には炭化物と土器を含む層がある。土坑墓と考えられる。弥生時代中期の土器、石斧の刃部が出土している。

SK07 (第8図)

B15区に位置する。西端をSK06に切られている。確認長4.16m、短軸0.80m、深さ0.48mを測り、平面長楕円形を呈す。底面はほぼ平坦で、壁が直立ぎみに立ち上がる。断面は箱状を呈す。土坑墓と考えられる。弥生時代中期の土器、打製石斧片が出土している。

SK08 (第8図)

A15区に位置する。南側をSD02に切られている。長軸1.83m、短軸1.69m、深さ0.44mを測り、平面円形を呈す。底面は平坦で壁が外方に立ち上がる。断面は逆台形状を呈す。覆土の中層に炭化物と土器を含む層がある。土坑墓の可能性が考えられる。弥生時代中期の土器の他に、木片の小片が出土している。

SK09 (第8図)

A21区に位置する。長軸1.06m、短軸0.80m、深さ0.26mを測り、平面楕円形を呈す。底面は平坦で、壁が外方に立ち上がる。断面は浅皿状を呈す。遺物は出土していない。

SK10 (第8図)

A22区に位置する。長軸0.93m、短軸0.82m、深さ0.21mを測り、平面円形を呈す。底面は段を有し、壁が外方に立ち上がる。断面は逆台形状を呈す。遺物は出土していない。

SK11 (第9図)

B21区に位置する。長軸0.60m、短軸0.51m、深さ0.25mを測り、平面隅丸方形を呈す。底面は緩く段を有し、壁が外方に立ち上がる。断面は逆台形状を呈す。遺物は出土していない。

SK12 (第9図)

A23区に位置する。長軸1.15m、短軸0.87m、深さ0.30mを測り、平面不整円形を呈す。底面は緩く段を有し、断面は逆凸状を呈す。遺物は出土していない。

SK13 (第9図)

B25区に位置する。長軸1.50m、短軸1.05m、深さ0.25mを測り、平面隅丸方形を呈す。平坦な底面から壁が立ち上がる。断面は浅皿状を呈す。遺物は出土していない。

SK18 (第9図)

A23区に位置する。SP41に切られる。長軸1.12m、短軸0.70m、深さ0.23mを測り、平面不整隅丸方形を呈す。底面は緩く段を有し、断面は逆台形状を呈す。遺物は出土していない。

SK25 (第9図)

A23区に位置する。長軸0.78m、短軸0.77m、深さ0.37mを測り、平面隅丸方形を呈す。断面は上段が浅皿状、下段が箱状の二段掘り状を呈す。遺物は出土していない。

SK26 (第9図)

B18区に位置する。長軸1.16m、短軸0.69m、深さ0.22mを測り、平面隅丸方形を呈す。平坦な底面から緩く壁が立ち上がる。断面は逆台形状を呈す。弥生時代中期の土器が出土している。

SK30 (第9図)

AB14区に位置する。長軸1.65m、短軸1.11m、深さ0.43mを測り、平面楕円形を呈す。覆土は下層にややしまりの強い砂質土が堆積している。底面は緩く段を有し、壁が外方に立ち上がる。断面は逆台形状を呈す。遺物は出土していない。

SK31・32・33 (第9図)

A16区に位置する。SK31とSK32がSK33を切っている。SP52との前後関係は不明である。SK31は推定径1.75m前後、深さ0.32mを測り、平面多角形状を呈すと考えられる。SK32の平面形は楕円状を呈すと推定される。長軸等は不明だが深さは0.3mを測る。平面形は楕円形と推定される。SK33は推定長軸1.66m、推定短軸1.0m前後、深さは0.28mを測る。緩やかな段を有し、断面半円状を呈す。平面形は楕円形を呈すと考えられる。SK31はSK08と同様に土坑墓の可能性が考えられる。SK31～33からは弥生時代中期の土器が出土している。

SK35 (第5図)

A15区に位置する、浅皿状の落ち込みで、明瞭な立ち上がりをもたない。弥生時代中期の土器が出土している。

3 ピット・その他の遺構

ピットは52基を検出しているが、明確に柱穴といえるものは確認しておらず、建物を構成するものはないと考えられる。遺物を伴うものはわずかであるため、1基のみ取り上げる。

SP50 (第10図)

B14区に位置する。長軸0.58m、短軸0.52m、深さ0.12mの平面方形、底面は平坦面を呈す。覆土は炭化物を含んだ暗褐色粘質土だが、その下層には白色粘土が4～10cmの厚さで堆積していた。断面の観察からは容器に類する土層は確認できなかった。何らかの意図の下に粘土を埋設していたと考えられる。暗褐色粘質土層から弥生土器片が出土している。

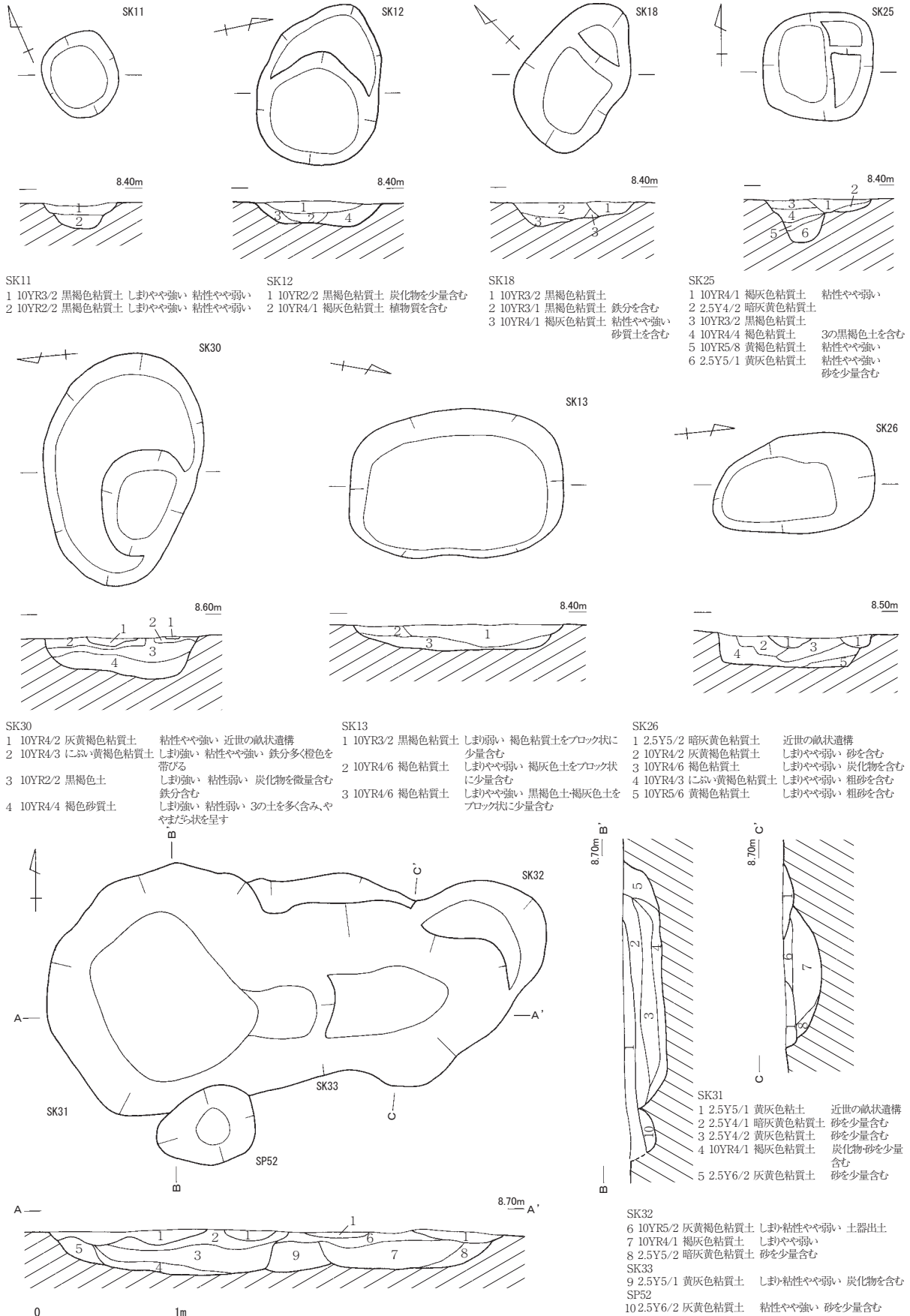
南壁断面検出遺構 (第10図)

B17区に位置する。調査区の周囲の排水路掘削時に南壁断面から大型の壺形土器の底部が正位で出土したことから確認した。後世の掘削、近世初頭の畝状遺構に切られ、大きく削平されており、遺構および土器の上部は失われている。断面形状など規模は不明である。調査区内ではプランが確認できないことから、土器は遺構端部に据えられていたようである。

第2節 その他の時代の遺構

弥生時代以外の時期の遺構では、近世の畝状遺構、井戸2基、ピット多数を確認した。畝状遺構については、ほぼ調査区全面に分布しているが、西側調査区については、調査の進捗の関係上すべてを掘削してはいない。

第2節 その他の時代の遺構



第9図 遺構図4(縮尺1/40)

1 畝状遺構について (第5図)

東側調査区について概要を述べると、溝の方向は2～6区までは南北方向が主体となるが、7～12区では東西方向の溝が加わり碁盤目状を呈す。規模は幅10cm、深さ5cmのものが主体だが、何度も掘り返されることで幅広を呈す溝もある。これらの溝は、畑の畝と畝の間に設けられたもので、近世には畑地が展開し、繰り返し耕作が行われたことを示す。出土遺物には、弥生土器、律令期の須恵器、中近世の土師質皿・陶磁器が混在している。

2 井戸

井戸は2基を検出した。2基とも井戸側等の構造物を持たない素掘りの井戸である。

SE01 (第10図)

B24区に位置する。長軸0.60m、短軸0.52m、深さ0.63mの平面円形を呈す。平坦な底面から壁が立ち上がる円筒状となり、規模および土層の観察から判断すると、構造物をもたない素掘りの井戸である。覆土は褐色粘質土を主体とし、畝状遺構の覆土と共通する。浅いながらも底面は湧水層に達していた。おそらく畑地内に設けられた灌漑用の簡易な井戸と考えられる。底面から約15cm浮いた状態で近世初頭の播鉢が、1個体分の破片を重ねるように、また播鉢上には角礫・棒状木片が廃棄された状態で出土した。他に土師質皿小片が出土している。

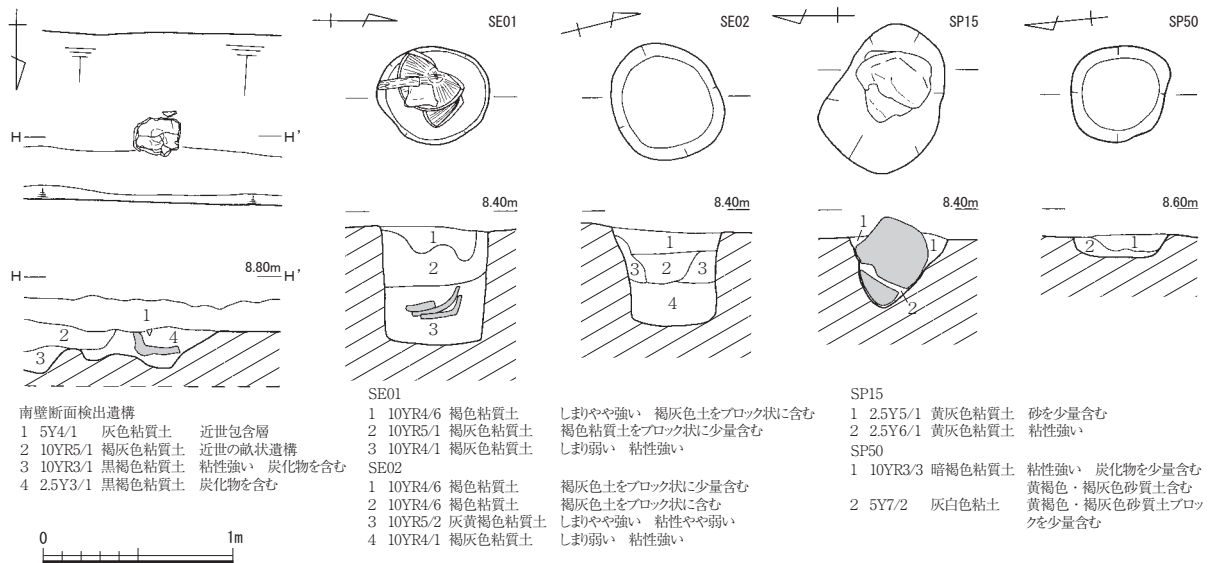
SE02 (第10図)

B24区に位置する。SE01の西に隣接する。長軸0.63m、短軸0.55m、深さ0.52mの平面円形を呈す。平坦な底面から壁が立ち上がり、やや外方に開く。SE01と同様に構造物をもたない素掘りの井戸である。覆土は褐色粘質土を主体とし、畝状遺構の覆土と共通する。SE01との前後関係は不明だが、同様の性格を持つ井戸である。遺物は出土していない。

3 ピット

SP15 (第10図)

B23区に位置する。長軸0.42m、短軸0.31m、深さ0.32mの平面不整形円形を呈す。断面形は三角形を呈し、覆土は畝状遺構の覆土と共通する。欠損した石臼の下臼が出土している。



第10図 遺構図5 (縮尺1/40)

第5章 遺物

第1節 弥生時代の遺物

1 遺構出土土器

SD01出土土器（第11図1～10）

1は壺である。口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、刻みを施す。口縁端部にも細かな刻みを施す。頸部には櫛描直線文を複数帯めぐらし、4条のヘラ描き状の沈線がある。2～6は甕の口縁部で、6以外は端部に刻みを施す。外面をヨコ条痕調整する2と3、タテハケ調整の4と5がある。6は口縁端部を折り返す。7～10は壺の体部片で、ヘラ状工具による施文である8以外は櫛描直線文を施す。

SD02出土土器（第11図11）

11は甕の口縁部である。口縁はゆるく外方に開き、幅狭い面を有し、刻みを施す。内面には磨耗のため条数は不明だが、櫛描波状文2帯を施す。

SD05出土土器（第11図12～20）

12は口縁部が受口状を呈する近江系の壺である。口縁下端に刺突、肩部には直線文と刺突を施す。弥生時代後期前半のものである。13～17は甕である。13は、わずかに外方に傾斜する口縁端部に刻みを施す。外面はヨコ方向のナデの後、口縁下に横位の条痕文を施し、内面はナデ調整を行う。今回の資料の中で最も古相を示すもので、中期前葉に属する可能性がある。14はハケ調整の後、頸部から体部上半にかけて櫛描直線文を施す大型の甕である。直線文の間には明確な意図を感じない櫛描波状文を施している。底部は15となる。16は丸くおさめる口縁端部に刻みを施す。磨耗のため不明瞭だが、口縁内外面をヨコナデし、肩部以下、直線文と波状文を1帯ずつ施す。17は外面にヨコ条痕を施す。18～20は壺である。18は広口となる。口縁端部は丸くおさめ、刻みを施す。内外面ともハケ調整後にナデ調整を行う。20は壺の体部である。胴部最大径が下方に位置する器形となる。頸部下に直線文を施し、その上に刺突文のような簾状文を施す。

SD07出土土器（第11図21）

21は口縁部が受口状を呈する近江系の甕である。口縁外面は強いヨコナデにより凹線状を呈す。

SD08出土土器（第11図22～24）

壺が出土している。22と23は同一個体であり、長めの頸部から広口となる大型壺の頸部および肩部である。タテハケの後、ナデでハケ目を消し、櫛描直線文を施す。また、24の体部片も同様の調整・施文を行う。櫛の原体は22・23に似る。

SK01出土土器（第11図25～27）

25は幅狭の口縁帯を有する甕である。26は同じく幅狭の口縁帯を有する壺である。ハケ状工具で口縁外面を調整する。27は脚裾部である。外面をミガキ調整する。これらは弥生時代後期前半に属する。

SK03出土土器（第11図28～32）

28は甕である。弱く外傾する口縁端部にヘラ刻みを施し、外面全体に条痕文を施す。内面はナデにより、平滑に整えられる。外面には煤が、内面にはコゲ痕がある。29は小片のため、甕か壺かは定かではないが、外面のタテハケをヨコナデで消した後、丸くおさめた口縁端部に刻みを加える。刻みは5個を確認するのみであるが、口縁を全周はしないようである。頸部にはヘラ描きの浅い沈線を施す。内面は

ヨコナデ調整である。30は広口となる壺の頸部と考えられる。断面三角形の突帯を2本貼り付ける。胎土の色調が他の土器と違い、赤みを帯びている。他地域からの搬入品であり、敦賀の周辺地域からの可能性がある。31と32は甕と考えられる底部である。31には復元径約1cmの焼成後穿孔がなされる。32の底面には中心からずれたところに焼成後穿孔がなされる。

SK04出土土器（第11図33）

33は口縁部が受口状を呈する近江系の甕である。口縁下端にハケ状工具による刺突をめぐらせる。

SK05出土土器（第11図34）

34は大型となる壺の口縁部である。同一個体と考えられる破片がSK06からも出土している。

SK06出土土器（第11図35・36、第12図1～4）

第11図36・第12図1～3は甕である。36は丸くおさめた口縁端部に刻みを施す。第12図1・2は口縁を外方に屈曲させる。1は端部を丸くおさめる。外面には条痕ともとれるハケ調整を施す。2は端部をヨコハケ調整し、面取りする。外面のタテハケ調整は口縁端部下まで施す。内面は口縁にヨコハケ調整、体部をハケの後ナデ調整を行う。1・2ともに刻みは施さず、外面に煤が付着する。3は甕の体部上半部である。外面は鉄分の付着が著しく、十分に観察ができないが、櫛描などの文様はない。第11図35と第12図4は壺である。35の口縁部端面には斜格子文を施す。頸部はタテハケ後にヨコナデする。沈線が1条のみ残存する。

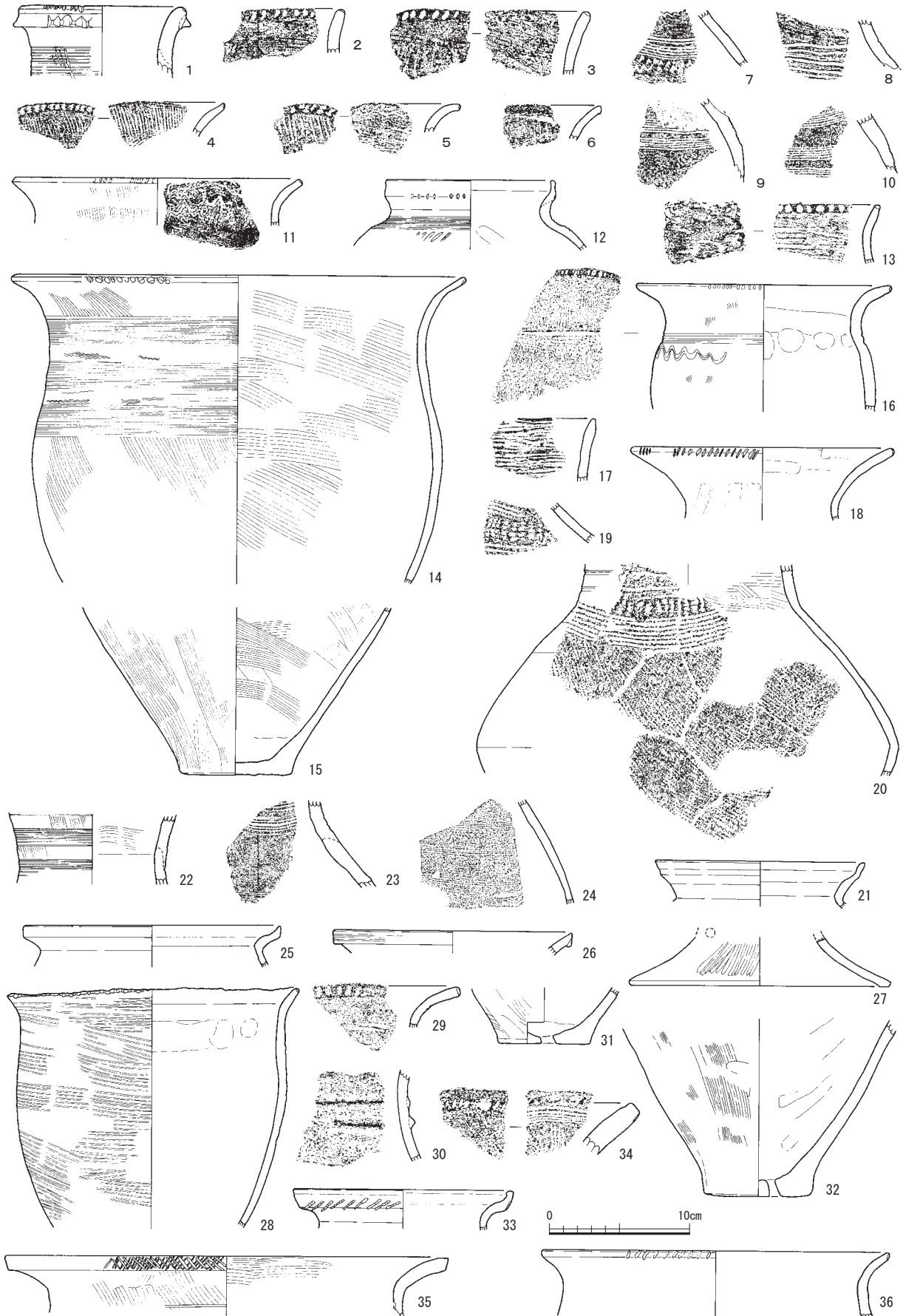
SK07出土土器（第12図5～12）

5・7～9は壺である。5は口縁端部が拡張し直線文を施す。7は袋状を呈する口縁部である。形状から、明瞭に袋状を呈するというより内傾すると考えられる。口縁端部はナデにより平坦面となり、外面はヨコハケを施す。8は大型広口壺の口縁である。外面の調整は不明だが、口縁端部の平坦面にはかろうじて上下からの刺突が確認できる。内面の文様は、他の土器よりも細い櫛状工具を使用し、上から直線文、半同心円文と竹管状の円形刺突が施される。口縁内面の施文から、山陰地方の影響が窺える。SK05とSK06から同一個体と考えられる破片が出土している（第11図34、第12図4）。9は体部片で、上から山形文、櫛描波状文、櫛描直線文を施す。6・10は甕である。6は頸部から口縁がゆるく屈曲して立ち上がる。2個1対の押圧が1箇所残存し、山形状となる。内外面ともやや細かい条痕調整を施す。10は外方へ緩やかに広がる口縁端部を丸くおさめる。11・12は甕または壺の底部である。11は外面をハケ調整の後ナデでハケ目を消す。12は被熱痕があり、底部の作りは薄い。

SK08出土土器（第12図13～22）

13～16は甕である。13・14は緩やかに外反する口縁端部に刻目を施す。14は頸部にタテの、胴部にナメのハケとも取れる条痕を施す。頸部下には櫛描波状文1帯を施す。15は甕の口縁部である。2個1対の刺突を施す。調整は不明瞭だが、外面タテハケ、内面ヨコハケの後、口縁端部をヨコナデし、丸くおさめる。16は外反する口縁端部をヨコハケ調整し、押圧を施す。外面はタテの、内面はヨコ方向のハケ調整である。17～20は壺である。17の器形は、内傾する頸部から口縁が直線的に外傾する。口縁には1条の沈線を引いた後、刻みを施す。頸部には4条1単位の櫛描直線文と波状文を施す。18は短い頸部から口縁が屈曲し、肩部の張りが弱く、なで肩を呈す。残りが悪いため、全体に調整・文様は不明瞭であるが、口縁端部には刻みをめぐらす。頸部以下には、条数は不明だが櫛描直線文を複数帯施文し、肩部には櫛描波状文を1帯挟む。頸部下の条数は間隔から、ヘラ描きのようである。19は広口となる壺である。口縁端部は面取りされ、頸部以下に櫛描直線文を複数帯施す。20は肩部である。外面はかろうじ

第1節 弥生時代の遺物



第11図 遺構出土土器実測図1 (縮尺1/4)

てハケ調整が観察できるのみである。21・22は底部片である。21の胎土、色調は第12図8に似る。22の外側はハケ調整、内側はナデ調整である。

SK30出土土器（第12図23・24）

23は櫛描波状文と直線文、24はナナメの条痕が施される。

SK32出土土器（第12図25～27）

25～27は同一個体であり無頸壺である。口縁端部にヘラによる刻み目が入り、口縁部下からおそらく胴部上半にかけてタテハケ調整の後、4条の櫛描直線文が複数帯施される。内側はナデ調整である。

SK35出土土器（第12図28～31）

28の甕内面には縦の直線文の左右に波状文や刺突を施す。30は粘土帯を貼り付けた壺の肩部である。

2 包含層出土の土器（第13図）

1～4は壺の口縁である。1は口縁端面に斜格子文、内側には羽状刺突を施す。外側は斜め方向のハケ目をナデ消している。2は口縁端面に刻みを施し、内側は無文である。3は細くすぼまった頸部から口縁が受口状に端部が立ち上がる。4は直線的に伸びる口縁部に櫛描直線文を施す。5は壺の体部片で羽状刺突を施す。6は高坏または器台の脚裾部である。弥生時代後期に属する。7・8は底部片、9は大型壺の底部である。外側はタテハケ、内側はハケ調整後ナデ消している。10は弥生時代中期の土器を転用した土製有孔円盤である。周囲を打ち欠いたのみであり、片面からの穿孔で未貫通である。

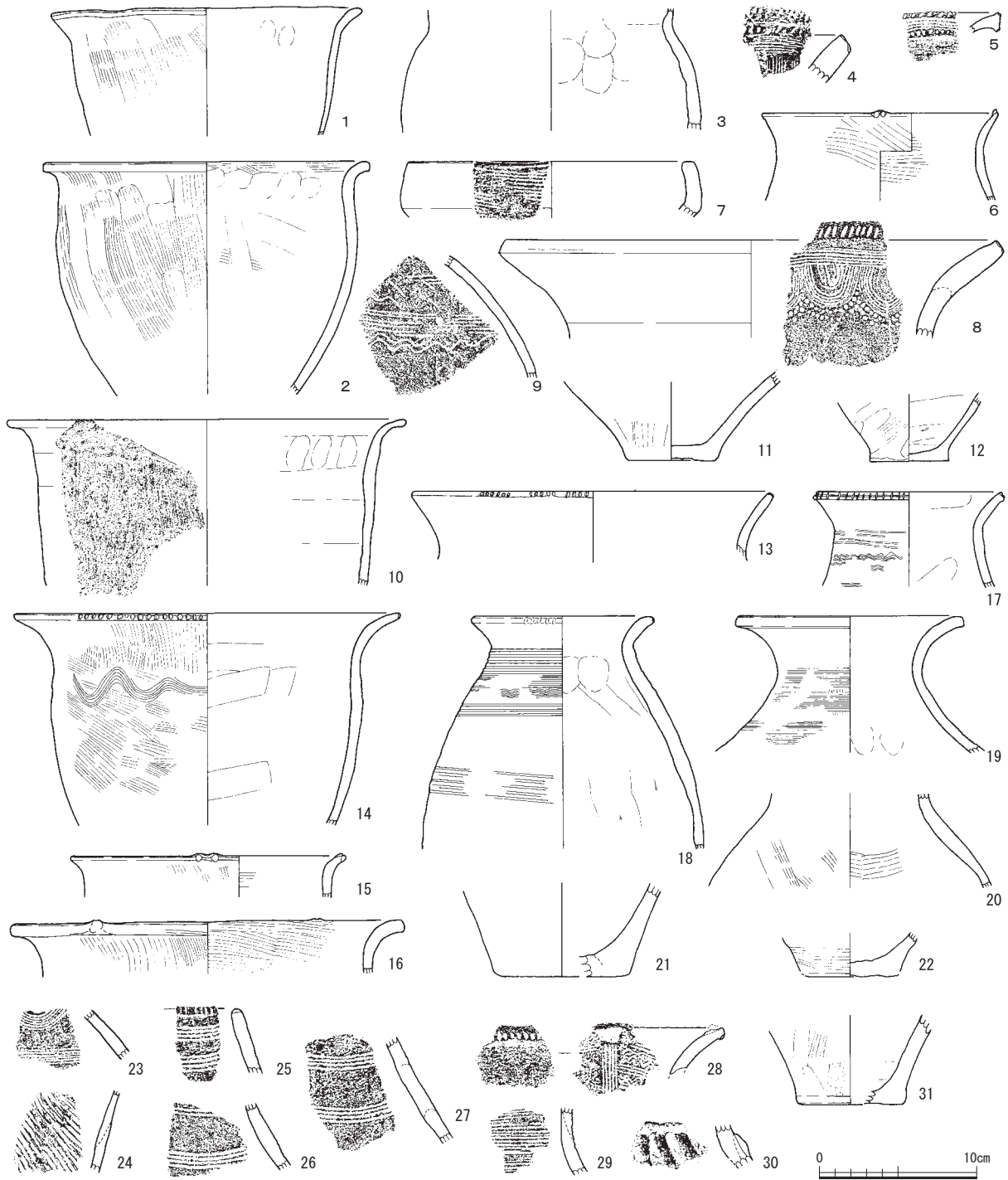
3 石器（第14図）

弥生時代の石器は遺構・包含層とも種別・量とも少ないため、まとめて取り上げる。包含層出土のものは形態・風化の状況から弥生時代のものと判断した。

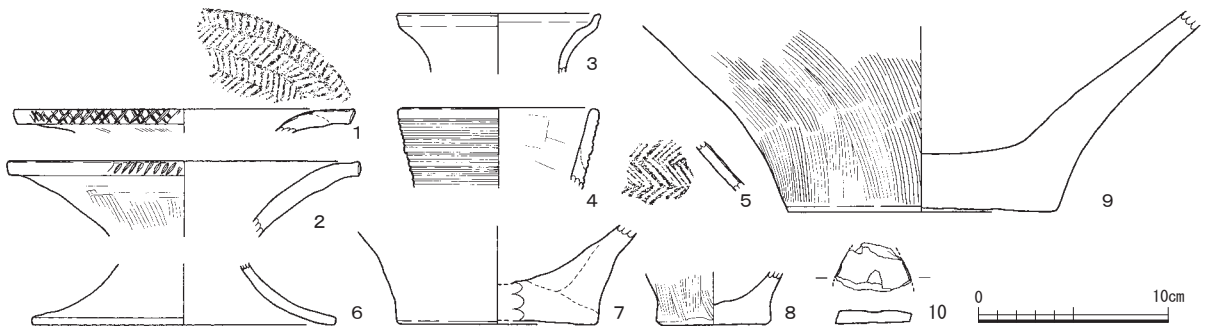
1～3は磨製石斧である。1は柱状片刃石斧で抉りが入る。2は大型蛤刃石斧の刃部、3は基部である。4は打製石斧である。刃部は素材を割り取った際の縁辺を利用している。5は凹石である。径は5cm程度と小型であるが、中央に窪みを有し、裏面にはわずかにあたりをつけたような欠損が確認できる。全体を丁寧に研磨している。6は砥石と考えられる。小型で断面三角形の形状は、手に持って使用することが考えられる。7は大きく欠損しているが、上下を丁寧に整形して面取りしており、表面には5条の浅い窪みがある。砥石としての使用が想定される。8・9は縁辺を打ち欠き、一部を研磨した剥片である。刃部以外の表裏、側面とも凹凸を取るように粗く研磨される。穂摘具や搔器としての用途が考えられる。10は研磨および使用による光沢が顕著な刃部片である。刃部が弧を描き、本来は扇形を呈すると考えられる。穂摘具の可能性はある。

第2節 その他の時代の遺物（第15図）

1～6は須恵器である。2は無台坏で、3～5は有台坏である。6は坏底部を円形に打ち欠いた円板である。破断面を一部研磨している。7は白磁の碗で、口縁は玉縁状を呈す。8・9は青磁の碗である。9は不明瞭だが、8は外側に蓮弁文を施す。10～12は瀬戸産の皿で、10・11は卸皿である。13は白磁の紅皿で近世に属す。14は磁器の碗で肥前産である。いわゆるくらわんか碗で、19世紀前半に属す。15～17は土師質皿である。口縁部には灯芯油痕が残る。18は天目茶碗の高台部分であるが、体部を意図的に打ち欠いている。19～21は越前焼の播鉢である。SE01出土の21は略完形であるが、漆状の接着剤で補修されている。内面全面と見込みには十字に播目が施される。外側は所々粘土接合痕が、底面付近には縄目痕残り、整形はやや雑な印象を受ける。体部の立ち上がりやや上の播目が磨耗している。また

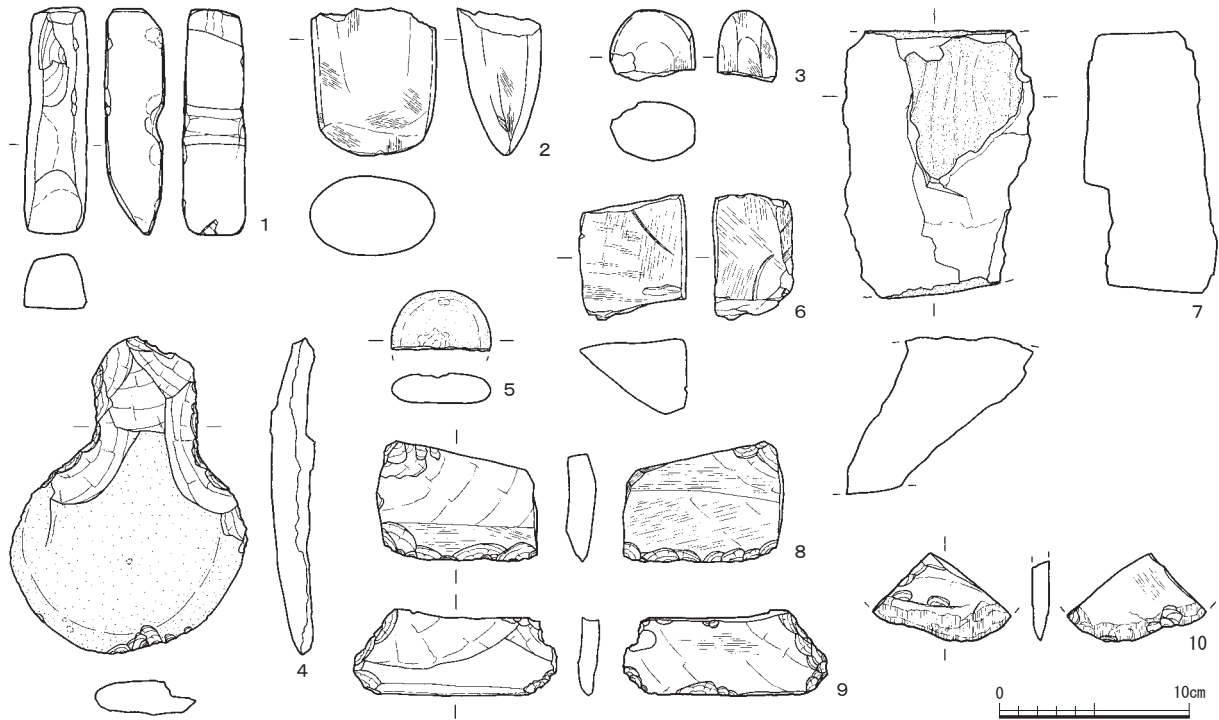


第12図 遺構出土土器実測図2(縮尺1/4)

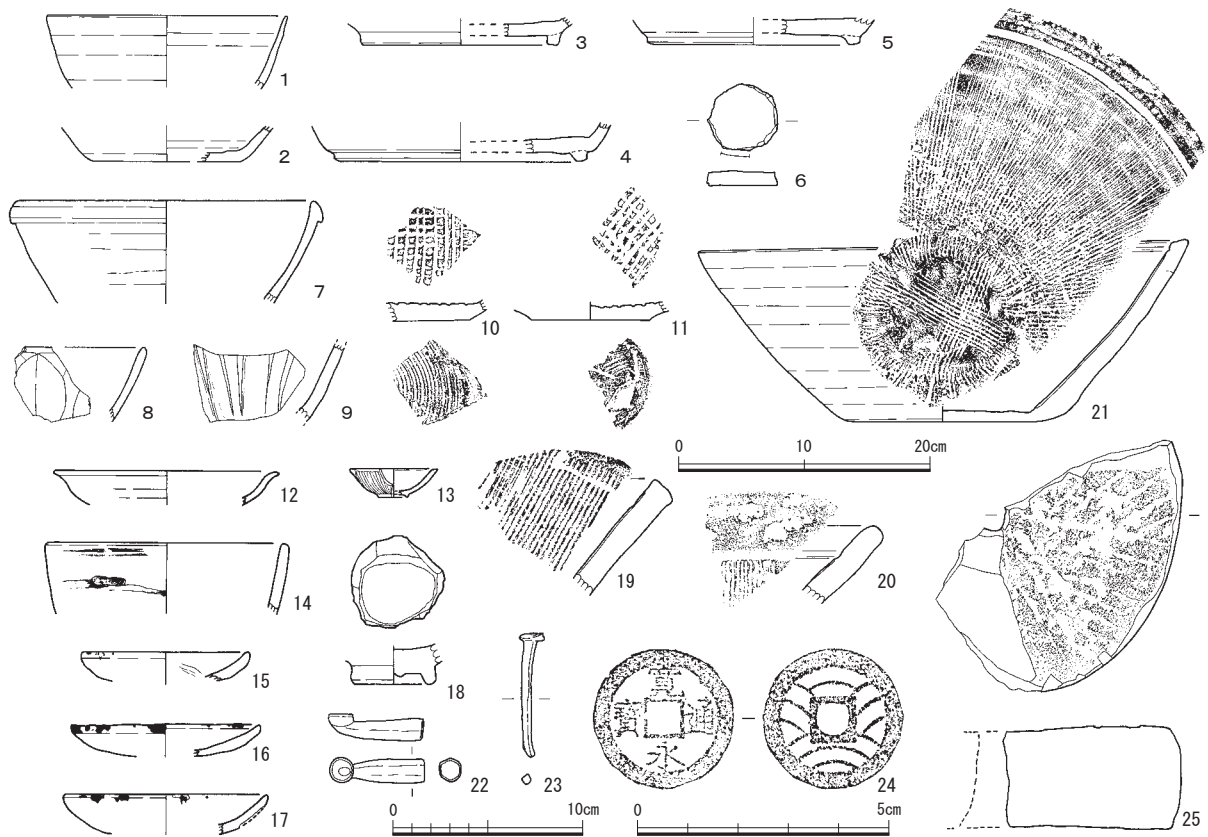


第13図 包含層出土土器実測図(縮尺1/4)

内面口縁下の沈線の上も磨耗が激しく、口縁端部には敲打痕が巡る。16世紀後半から17世紀初頭と考えられる。22・23は金属製品で22は煙管の雁首、23は釘である。24は銭貨で、寛永通宝である。25は笏谷石製の石臼の下臼である。一部に煤が付着する。



第14図 石器実測図(縮尺1/4)



第15図 その他の出土遺物実測図(縮尺1~20・22・23:1/4、24:2/3、21・25:1/6)

第2節 その他の時代の遺物

第1表 弥生土器観察表

単位:cm

挿図番号	区	遺構・層位	器種・部位	口径	残存高	底径	調整・施文	色調	胎土	焼成	備考
第11図1	A11	SD01	壺	11.6	5.1	—	外)口 貼り付け突帯+ヘラ刻み 頸 櫛描直線文7条 内)ヨコナデ	にぶい橙色	⑤	良	ヘラ描き?
第11図2	A11	SD01	甕	—	3.1	—	外)口 刻み ヨコ条痕 内)ナデ	灰黄褐色	⑤	良	
第11図3	B11	SD01	甕	—	4.5	—	外)口 刻み ヨコ条痕 内)ヨコ条痕	にぶい黄褐色	⑤	良	
第11図4	A12	SD01	甕	—	2.5	—	外)口 刻み 以下タテハケ 内)タテハケ	にぶい黄褐色	①	良	
第11図5	B11	SD01	甕	—	2.0	—	外)口 刻み 以下タテハケ 内)ヨコハケ後波状文	灰白色	⑤	良	
第11図6	A12	SD01	甕	—	2.5	—	外)タテハケ後ヨコナデ 内)ヨコナデ	黄褐色	⑤	良	
第11図7	A11	SD01	壺	—	—	—	外)ナデ後櫛描直線文5条2帯(?) 三角形の刺突列点文 内)ハケ後ナデ	灰黄褐色	①	良	
第11図8	A11	SD01	壺	—	—	—	外)ヨコナデ後ヘラ描直線文 内)不明	橙色	⑤	良	
第11図9	—	SD01	壺	—	—	—	外)櫛描直線文6条2帯 内)ナデ	浅黄褐色	⑥	良	
第11図10	A12	SD01	壺	—	—	—	外)櫛描直線文6条3帯 内)ナデ	浅黄褐色	⑥	良	
第11図11	A15	SD02	甕	20.2	3.4	—	外)口 刻み 頸 タテハケ 内)櫛描波状文2帯	にぶい黄褐色	②	良	
第11図12	B16	SD05	壺	11.8	5.0	—	外)口下端 刻み 肩 直線文7条 刺突 内)ヨコナデ 頸以下強いナデ	にぶい黄褐色	①	良	
第11図13	B16	SD05	甕	—	4.3	—	外)口 ヘラ刻み ヨコ条痕 内)ヨコナデ	にぶい黄褐色	⑤⑦	良	
第11図14	B16	SD05	甕	32.6	22.0	—	外)口 刻み タテ・ナメハケ後櫛描直線文複数帯波状文2帯? 内)ヨコ・ナメハケ	浅黄褐色	⑤⑦	良	被熱痕あり 煤付着
第11図15	B16	SD05	甕底部	—	12.0	8.0	外)タテハケ 内)ヨコハケ 底 ナデ	橙色	⑤	良	底部被熱
第11図16	B16	SD05	甕	18.0	8.9	—	外)口 刻み 体 タテハケ後ナデ 櫛描直線文3条1帯 波状文2条1帯 内)口ヨコナデ 以下タテ・ヨコナデ	にぶい黄褐色	①	良	
第11図17	B16	SD05	甕	—	4.5	—	外)ヨコ条痕 内)ナデ	灰黄褐色	③	良	雲母微量
第11図18	B16	SD05	壺	18.2	5.3	—	外)口 ヘラ刻み 頸 ハケ後ナデ 内)ハケ後ナデ	橙色	①	良	
第11図19	B16	SD05	壺	—	—	—	外)櫛描直線文2帯の間に刺突列点文 内)ナデ?	にぶい橙色	②	やや良	
第11図20	B16	SD05	壺	—	15.0	—	外)ナメハケ後櫛描直線文4条4帯 列点文状の簾状文 内)頸ヨコハケ体 ナデ	にぶい黄褐色	③	良	
第11図21	A18	SD07	甕	15.0	3.0	—	外)ヨコナデ 内)ナデ	淡黄色	⑤	良	
第11図22	A2	SD08	壺	—	4.8	—	外)タテハケをナデ消し後櫛描直線文8条3帯以上 内)ヨコハケ ナデ	にぶい橙色	①	良	
第11図23	A2	SD08	壺	—	6.3	—	外)櫛描直線文8条1帯を3帯以上 内)ナデ+指オサエ	にぶい橙色	①	良	
第11図24	A2	SD08	壺	—	—	—	外)ハケをナデ消し後櫛描直線文8条4帯以上 内)ヨコナデ	にぶい黄橙	②	良	
第11図25	B7	SK01	甕	18.2	3.0	—	外)ヨコナデ 内)ヨコナデ	浅黄褐色	⑤	良	
第11図26	B7	SK01	壺	17.2	1.8	—	外)口ヨコハケ 頸ヨコナデ 内)ヨコナデ	にぶい橙色	③	良	
第11図27	B7	SK01	脚楯部	—	3.5	18.6	外)ミガキ 内)不明	にぶい黄褐色	①	良	
第11図28	B16	SK03	甕	20.9	17.2	—	外)口 ヘラ刻み ヨコ・ナメ条痕 内)ナデ 指オサエ	にぶい黄褐色	④	良	煤付着
第11図29	B16	SK03	甕	—	3.0	—	外)口 ハケ原体の刻み タテハケ後ヨコナデ ヘラ描き沈線2条残 内)ヨコナデ	にぶい黄褐色	①	良	雲母微量
第11図30	B16	SK03	壺	—	—	—	外)貼付突帯2帯 内)不明	橙色	②	不良	搬入品
第11図31	B16	SK03	底部	—	3.8	6.6	外)ハケ後ナデ 内)ナデ	にぶい黄褐色	①	良	底部焼成後穿孔
第11図32	B16	SK03	底部	—	11.9	7.6	外)ハケ後ナデ 内)上半ハケナデ 下半ナデ	浅黄褐色	②	良	底部焼成後穿孔
第11図33	B15	SK04	甕	15.6	2.8	—	外)口下部 ハケ原体の刺突 ヨコナデ 内)ヨコナデ	にぶい黄褐色	⑤	良	近江系
第11図34	B15	SK05	壺	—	3.7	—	外)口 上下端部ヘラ刻み 内)櫛描直線文と櫛描半裁円形文?	浅黄褐色	⑥	良	第12図8と同一個 体
第11図35	B15	SK06	壺	31.8	4.1	—	外)口 斜格子文 頸 タテハケ後ヨコナデ ヘラ描き1条 内)ヨコハケ+ヨコナデ	橙色	⑤	良	
第11図36	B15	SK06	甕	24.6	4.8	—	外)口 刻み 内)不明	灰白色	③	良	
第12図1	B15	SK06・07	甕	19.8	8.4	—	外)口ヨコナデ 体 タテハケ 内)ヨコナデ 指オサエ	橙色	⑤⑦	良	煤付着
第12図2	B15	SK06・07	甕	20.8	14.8	—	外)口ヨコナデ 体 タテハケ 内)口ヨコハケ 体 ハケ後ナデ 指オサエ	褐色	①	良	煤付着
第12図3	B15	SK06	甕	—	7.8	—	外)ナデ? 内)ナデ+指オサエ	にぶい橙	①	良	
第12図4	B15	SK06	壺	—	3.7	—	外)口ヘラ刻み ナデ 内)ナデ 櫛描直線文と櫛描半裁円形文?	橙色	⑥		第12図8と同一個 体
第12図5	B15	SK07	壺	—	1.3	—	外)口 上下に刻み 櫛描直線文4条 内)ヨコナデ	灰黄色	③	良	
第12図6	B15	SK07	甕	15.0	5.6	—	外)口 2個1対ヘラ刺突 体 ナメ条痕 内)ヨコハケ	浅黄褐色	③	良	雲母微量
第12図7	B15	SK07	壺	18.0	3.5	—	外)ヨコハケ 内)ナデ	灰白色	①	良	
第12図8	B15	SK07	壺	31.4	6.3	—	外)口 端部ヘラ刻み 内)櫛描直線文7条 櫛描半裁円形文 円形刺突2段	浅黄褐色	⑥	良	
第12図9	B15	SK07	壺	—	—	—	外)櫛原体による山形文1帯 櫛描直線文2帯以上 櫛描波状文 内)不明	灰黄褐色	②	良	
第12図10	B15	SK07	甕	25.2	10.7	—	外)口 ナデ 体 タテハケ 内)口ヨコハケ 体ヨコ+ナメナデ	黄褐色	①	良	
第12図11	B15	SK07	底部	—	5.1	5.8	外)タテハケ後ナデ 内)ナデ	灰白色	②	良	
第12図12	B15	SK07	底部	—	3.8	5.2	外)ハケ後ナデ 内)ナデ	にぶい黄褐色	②	良	
第12図13	A15	SK08	甕	22.8	4.4	—	外)口ヘラ刻み 内)ナデ	褐色	③	不良	
第12図14	A15	SK08	甕	24.8	13.5	—	外)口 刻み 以下タテ+ナメ条痕後波状文3条1帯 内)ヨコ+ナメナデ	にぶい黄褐色	⑤⑦	良	条痕文系 煤付着
第12図15	A15	SK08	甕	17.6	2.8	—	外)口 2個1対ヘラ刺突 タテハケ 内)ヨコハケ	にぶい黄褐色	②	良	
第12図16	A15	SK08	甕	25.0	3.4	—	外)ヨコハケ+タテハケ 内)ヨコハケ	にぶい黄褐色	⑤	良	押圧1カ所あり
第12図17	A15	SK08	壺	11.6	6.0	—	外)口 1条の沈線後ヘラ刻み 頸 櫛描直線文と櫛描波状文 内)ナデ	灰白色	②	良	
第12図18	A15	SK08	壺	11.6	14.9	—	外)口 刻み 体 櫛描直線文複数帯 櫛描波状文1帯 内)ナデ	にぶい黄褐色	⑥⑧	良	
第12図19	A15	SK08	壺	14.2	8.5	—	外)口ヨコナデ 頸以下 タテハケ後櫛描直線文複数帯 内)口ヨコナデ 頸以下 ナデ+指オサエ	淡黄色	⑤	良	

第5章 遺物

挿図番号	区	遺構・層位	器種・部位	口径	残存高	底径	調整・施文	色調	胎土	焼成	備考
第12図20	A15	SK08	壺	—	5.9	—	外)ハケ 内)ハケ+ナデ	明黄褐色	①	良	
第12図21	A15	SK08	底部	—	5.4	8.8	外)ハケ(?) 内)ナデ	浅黄褐色	⑥⑧	良	
第12図22	A15	SK08	底部	—	2.5	6.3	外)ココハケ 内)ナデ	にぶい黄褐色	⑥⑧	良	内面コゲ痕あり
第12図23	B14	SK30	壺	—	—	—	外)ナデ後櫛描波状文6条1帯と櫛描直線文6条1帯 内)ナデ?	にぶい黄褐色	⑤	良	雲母微量
第12図24	B14	SK30	甕	—	—	—	外)ナメ条痕 内)ココナデ	灰黄褐色	⑤⑦	良	
第12図25	A16	SK32	壺	—	4.2	—	外)口ヘラ刻み 櫛描直線文4条2帯 内)ナデ	にぶい黄褐色	⑤	不良	無頭壺
第12図26	A16	SK32	壺	—	—	—	外)タテハケ後櫛描直線文4条2帯 内)ナデ	にぶい黄褐色	⑤	不良	第12図25と同一個体
第12図27	A16	SK32	壺	—	—	—	外)タテハケ後櫛描直線文4条2帯 内)ナデ	にぶい黄褐色	⑤	不良	第12図25と同一個体
第12図28	A15	SK35	甕	—	3.0	—	外)口刻み 内)櫛描直線文5条 左右に波状文・直線文・刺突列点文	褐灰色	①	良	瘤状突起剥離
第12図29	A15	SK35	壺	—	—	—	外)櫛描直線文複数帯 内)ナデ	黒褐色	②	良	
第12図30	A15	SK35	壺	—	—	—	外)貼付突帯にハケ原体(?)で押圧 内)不明	灰白色	⑤⑦	良	
第12図31	A15	SK35	底部	—	4.8	7.0	外)ハケ後ナデ 内)ナデ	橙色	⑥	良	
第13図1	B14	包	壺	18.0	1.3	—	外)斜格子文ハケ 内)羽状刺突	にぶい黄褐色	②	良	
第13図2	A2	試掘	壺	—	4.0	—	外)口刺突 タテハケ後ココハケ 内)ナデ	にぶい黄褐色	③	良	
第13図3	A16	包	壺	10.6	3.2	—	外)口ココナデ 内)不明	にぶい黄褐色	④	良	
第13図4	A15	包	壺	10.6	4.2	—	外)ココナデ後櫛描直線文6条2帯以上 内)ハケ後ナデ	浅黄褐色	③	良	
第13図5	B15	地山上	壺	—	—	—	外)羽状刺突 内)不明	淡黄色	⑤	良	
第13図6	B16	包	脚裾部	—	3.3	16.0	外)不明 内)不明	にぶい黄褐色	①	良	
第13図7	B25	包	底部	—	5.0	10.7	外)不明 内)不明	橙色	①	良	
第13図8	A2	試掘	底部	—	2.7	6.1	外)タテハケ 内)ナデ	にぶい黄褐色	⑤⑦	良	
第13図9	B17	南壁	壺底部	—	9.8	14.0	外)タテハケ 内)ハケ後ナデ	灰黄褐色	①	良	
第13図10	A2	包	有孔円盤	径 3.9	厚 0.7			浅黄色	①	良	土器転用 未貫通

第2表 石器観察表

単位:cm・g

挿図番号	区	遺構・層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	残存	備考
第14図1	B16	SD05	柱状片刃石斧	12.1	3.3	3.1	238	凝灰岩	完形	
第14図2	B15	SD06	磨製石斧	7.8	6.6	4.4	297	安山岩	刃部のみ	
第14図3	A25	包	磨製石斧	3.8	4.5	3.2	75.7	安山岩	基部のみ	
第14図4	B10	確認面上	打製石斧	16.8	12.6	2.2	385	デイスイト	完形	
第14図5	A15	包	凹石		径5.3	1.6	35.7	砂岩	1/2残	
第14図6	B15	包	砥石	6.6	5.6	4.1	210	凝灰岩	下半欠	
第14図7	B16	SD05	砥石	14.2	10.5	8.3	1340	砂岩	両側面欠損	4条の櫛状の筋有り
第14図8	A20	包	剥片石器	6.4	8.5	1.6	135.8	安山岩	不明	
第14図9	A2	包	剥片石器	4.6	10.8	1.2	81.3	安山岩	不明	
第14図10	B21	包	石包丁	4.7	7.3	0.9	33.2	安山岩	刃部片	

第3表 その他の時期の遺物観察表

単位:cm

挿図番号	区	遺構・層位	器種	口径	残存高	底径	調整・施文	色調	胎土	焼成	備考・産地
第15図1	B10	包	須恵器 坏	12.8	3.8	—	回転ナデ	灰色	①	良	
第15図2	B10	包	須恵器 無台坏	—	1.9	7.8	回転ナデ 底 ヘラ切り後ナデ	灰白色	①	良	
第15図3	B20	包	須恵器 有台坏	—	1.4	11.2	回転ナデ 底 ヘラ切り後ナデ 高台貼付後ナデ	灰白色	①	良	
第15図4	A11	包	須恵器 有台坏	—	1.9	13.4	回転ナデ 底 ヘラ切り後ナデ 高台貼付後ナデ	灰白色	①	良	
第15図5	B17	包	須恵器 有台坏	—	1.5	10.6	回転ナデ 底 高台貼付後ナデ	灰白色	①	良	
第15図6	B9	畝状遺構	土製円盤	径3.6~3.8	厚さ0.75		輪郭打ち欠き 側面研磨	灰白色	①	良	坏底部転用
第15図7	A24	包	白磁碗	15.6	5.3	—	透明釉	灰オリブ色	①	良	
第15図8	A20	包	青磁碗	—	4.0	—	鎚蓮弁文	灰オリブ色	①	良	中国
第15図9	A15	包	青磁碗	—	4.0	—	蓮弁文?	灰オリブ色	①	良	中国
第15図10	A17	包	御皿	—	1.1	—		灰白色	①	良	瀬戸
第15図11	A21	包	御皿	—	1.0	6.2		灰白色	①	良	瀬戸
第15図12	A22	包	皿	12.0	1.9	—		灰白色	①	良	瀬戸
第15図13	B7	畝状遺構	紅皿	4.7	1.5	1.6	透明釉	—	—	良	瀬戸
第15図14	A8	包	碗	—	3.8	—		灰白色	①	良	肥前
第15図15	A20	包	土師質皿	9.0	1.5	—		浅黄褐色	①	良	油痕付着
第15図16	B5	包	土師質皿	10.0	1.7	—		灰黄色	①	良	油痕付着
第15図17	B6	畝状遺構	土師質皿	10.8	2.1	—		灰白色	①	良	油痕付着
第15図18	A2	包	天目茶碗	—	2.2	4.6		黒色	②	良	
第15図19	東側	表土	播鉢	—	6.2	—		黄褐色	①	良	越前
第15図20	A11	包	播鉢	—	4.1	—		淡褐色	①	良	越前
第15図21	B24	SE01	播鉢	39.2	14.7	15.2		にぶい橙色	①	良	越前 補修痕

第4表 金属器・銭貨・石製品観察表

単位:cm

挿図番号	区	遺構・層位	器種・部位・銭種	計測値	備考
第15図22	B24	包	煙管	雁首 全長:5.04 火皿径:1.37 高さ:1.5 径:1.29	
第15図23	B10	包	釘	全長:6.60 最大幅:1.35	
第15図24	A5	包	銭貨	寛永通寶 径:2.85 内区径:2.19 厚:0.13 方孔径0.61	四文銭 初鑄:1769年
第15図25	B23	SP15	石臼	下臼 復元径:29.6 厚さ:8.4	被熱により全体に煤付着

第6章 まとめ

第1節 遺跡

今回の糞置遺跡の調査で確認した弥生時代の遺構は、ほぼ弥生時代中期に属する。過去の糞置遺跡の調査から当地の地形を概観すると、現半田町集落から調査が行われた北陸自動車道部分（第1図）は、文殊山から伸びる尾根状の微高地にあたり、その微高地に沿うように湿地や屈曲した川跡を確認している。微高地上は弥生時代前期から後期まで、土坑墓主体の墓域として利用され、後期前葉に環状土坑列群が現れる。弥生時代終末から古墳時代前期以降は、建物や井戸、堰を伴う溝などが確認され、居住域に変化している。川跡の北側では、中期の土坑墓、溝があり、散漫であるがやはり墓域として利用される。後期の遺構は希薄だが、古墳時代前期には方形周溝墓が出現する。他に水路と考える溝があるのみで、明確に居住域を示す遺構は希薄である。微高地上と違い、継続して墓域であったと考えられる。また、平成14年度調査区④区（第1図）の中央部以西は遺構自体が希薄となり、今回の調査区の20区以西（第5図）と共通するため、この辺りが川の北側に展開する墓域の西端の可能性もある。墓域東端は過去の調査の川跡の分流がSD01になるとすると、東西約100mの範囲を想定できる。弥生時代中期の遺跡では、居住域と墓域が明確に区分されている例から、この区域にも墓域が展開しており、今回の調査区は中期以降の墓域の北辺にあたる。居住域を示唆するものは東側調査区で確認した後期前半の井戸の可能性のあるSK01のみであった。

過去の糞置遺跡の調査や、今市岩畑遺跡、および旧清水町こしきだにあいだ畷谷在田遺跡D地点では、遠賀川系土器群が主体となる弥生文化が定着した中期前葉の時期の遺物が確認されている。これらの遺跡は、南越盆地から東西の狭い山地間を抜けた福井平野への南の玄関口にあたる位置に展開し、弥生中期以降の文化の進出の足掛かりになったことが想定できるが、担い手である人々の居住域は未だ不明である。今回の限られた遺構・遺物からも、その様相を窺うことはできなかった。

第2節 土器

今回出土した土器は弥生時代中期中葉に収まり、調整・文様施文から、器面を条痕調整する条痕文系のもものと、ハケ調整の後、櫛描文を施文する櫛描文系の大きく2つの系統に分けることが出来る。限られた遺構・遺物のため、実際の割合を反映していないと考えられるが、条痕文系の割合は低く、櫛描文系が主体となる。櫛描文系の甕は、口縁が緩やかに外反して開き、体部が緩やかな曲線を描くもの（第11図14・16など）と、短い口縁が弱く外方に屈曲し、体部は鉢状となるもの（第12図1・2など）がある。前者はハケ調整の後、直線文と波状文が、口縁端部には刻みが施される。後者はタテ方向のハケ調整を主体とするもので、いわゆるハケ甕といわれる。また、口縁端部を横ナデし、櫛原体または指などで押圧を施す近江地方の影響が考えられるもの（第12図6・15・16）がある。条痕文系の甕は、口縁が直立ぎみに立ち上がるもので、口縁下に横および斜めに条痕を施すもの（第11図2・3など）と、口縁が短く外傾するもの（第11図28）がある。前者が古相で後者が新相を示す。直立気味に立ち上がるものは全形は不明だが、口縁端部に刻みを施すもの（第11図2・3）と施さないもの（第11図17）がある。口縁が短く開く第11図28は、口縁端部に押し引き状に刻みを施し小波状となる。どちらも口縁内面をナデ調整するものが主体となる。条痕文系の中には調整に、いわゆる櫛状条痕といわれる一見粗いハケの印

象を与える施文具を用いるものがある。第12図6も一見ハケ状を呈するが、おそらく外面は横羽状条痕を呈す。第12図14は櫛描文系土器に通有の施文位置に波状文を施す。また、第12図28の口縁内面に加飾した甕は、東海地方に系譜をもつ「大地式」の可能性はある。

壺には大型壺、広口壺、広口長頸壺、短頸壺、無頸壺などがあり、櫛描文系が主体となる。明確に条痕文系といえるものは確認していない。広口壺には口縁端部に刺突や斜格子文を施すもの（第11図18・35など）と無文のもの（第12図19）、口縁が短く外傾し施文パターンが共通するもの（第12図17・18）がある。第13図1は口縁内面に羽状刺突を巡らす。器形を窺えるものはないものの、長頸を呈すと考えられるものには、頸部に櫛描文を複数帯施すもの（第11図22）、断面三角形の突帯を貼付けるもの（第11図30）、直口する口縁に密に直線文を施すもの（第13図4）がある。第11図1の押圧突帯は条痕文系の影響が窺われ、古相を呈すと考えられる。他に、無頸壺（第12図25）はSK32出土の同一個体の破片を図示し得たのみである。また、他地域の影響が考えられるものには、東海地方の影響を受けた袋状口縁を呈すもの（第12図7）、近江地方の影響を受けた受口状口縁を呈すもの（第13図3）がある。大型となる第12図8は内面に施された細めの櫛状工具による文様パターンから他地域の影響が窺われる。第11図30は敦賀地域から搬入された可能性があり、この他に搬入品は確認していない。壺の中で古相を示すものには、第11図7の直線文と三角刺突で構成されるもの、同8のヘラ状工具で施文するものがあり、これらは櫛描文盛行以前に位置づけられる。

以上、出土土器を概観すると、条痕文系の甕では、横・ナナメ方向の条痕を施す口縁が直立ぎみのものが古相を示し、短く外傾するものが新相を示す。一方、ハケ調整のみの無文の甕がある。このハケ調整の甕はいわゆるハケ甕といわれ、近隣の今市岩畑遺跡や過去の糞置遺跡の調査でも多く確認されている。器形は倒鐘形を呈し、口縁が短く屈曲する。口縁端部の刺突・押圧の有無など、近畿地方においては調整・施文の違いから大和型、摂津型、近江型などに細分され第Ⅱ様式に出現する。これら近畿地方との共通する要素が、在地の条痕文系土器をしだいに取り込んでいくのが当該時期の特徴である。今回出土した弥生時代中期の土器は、条痕調整主体のものとハケ調整主体の二つの系統が互いに影響を与えつつも、次第に縄文時代の要素である条痕文系土器が消えていく段階にあたり、その過程においては近江・東海をはじめとする他地域の影響が窺える。それは櫛描文が北陸地方で全盛となる前段階といえ、これまでの時期区分では、中期前葉から中期後葉前半に比定できる。これを検出遺構に当てはめると、SD01は中期前葉から後葉前半にかけて、SK03は中期前葉に、その他の土坑・溝は中期後葉前半に位置付けられよう。

次の段階の土器では、口縁が「く」の字に屈曲する瀬戸内地方の影響を受けた凹線文系土器は確認していないものの、近江地方の影響を受けた受口状口縁を呈するものがある（第11図21・25・33）。これらは後期前半に属し、後期後半に入り北陸地方西部において全盛となる、口縁帯に擬凹線を施す土器が成立する前段階のものである。

参考文献

福井県教育委員会 1981 『福井県史 資料編13』

寺沢薫 森岡秀人編 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』 木耳社

福井県清水町教育委員会 2002 『甕谷』 清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『糞置遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第90集

写 真 图 版



(1) 遺跡遠景(北西から)



(2) SD01(南東から)



(3) SD08(南から)



(1) SD05(南東から)



(2) SK01(北東から)



(3) SK03(東から)



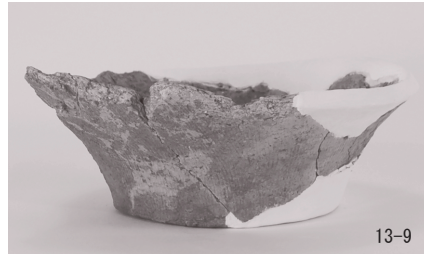
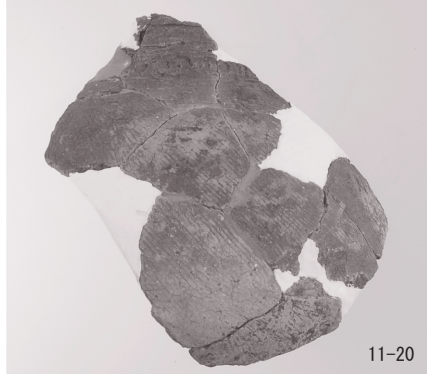
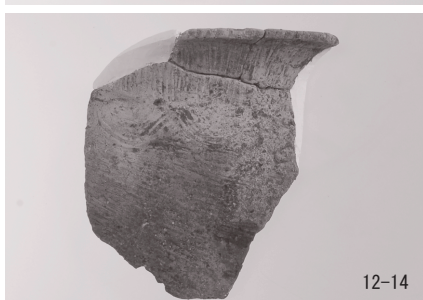
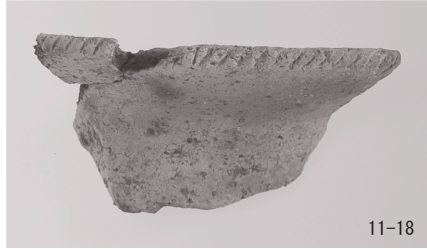
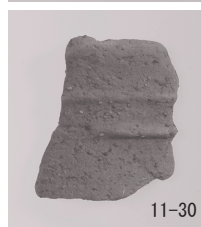
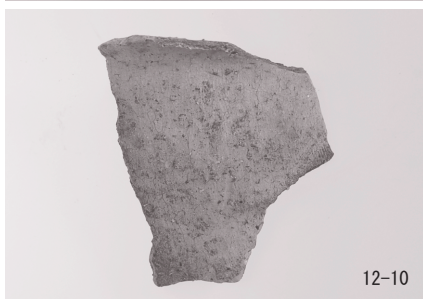
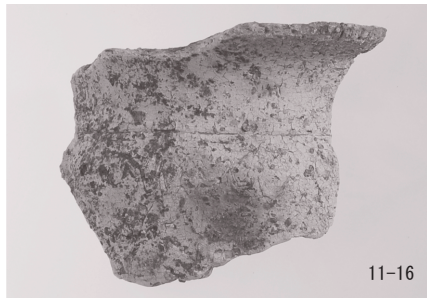
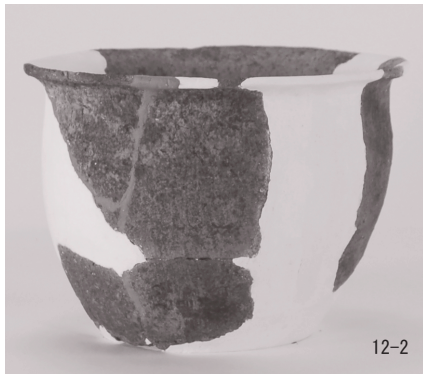
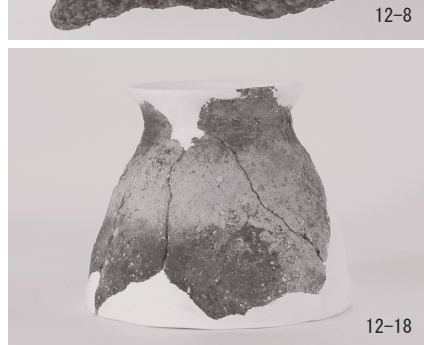
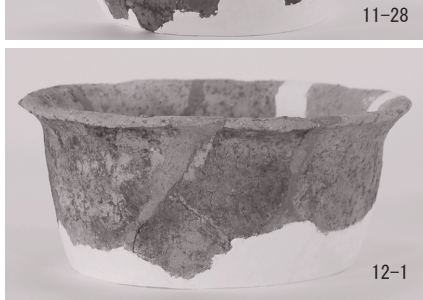
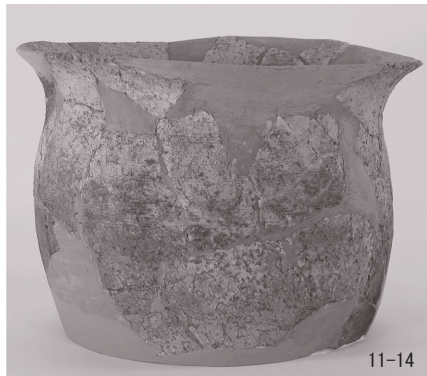
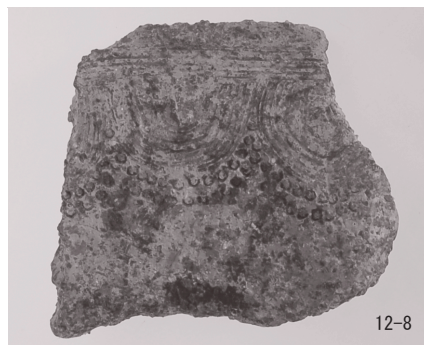
(4) SK06・07(西から)



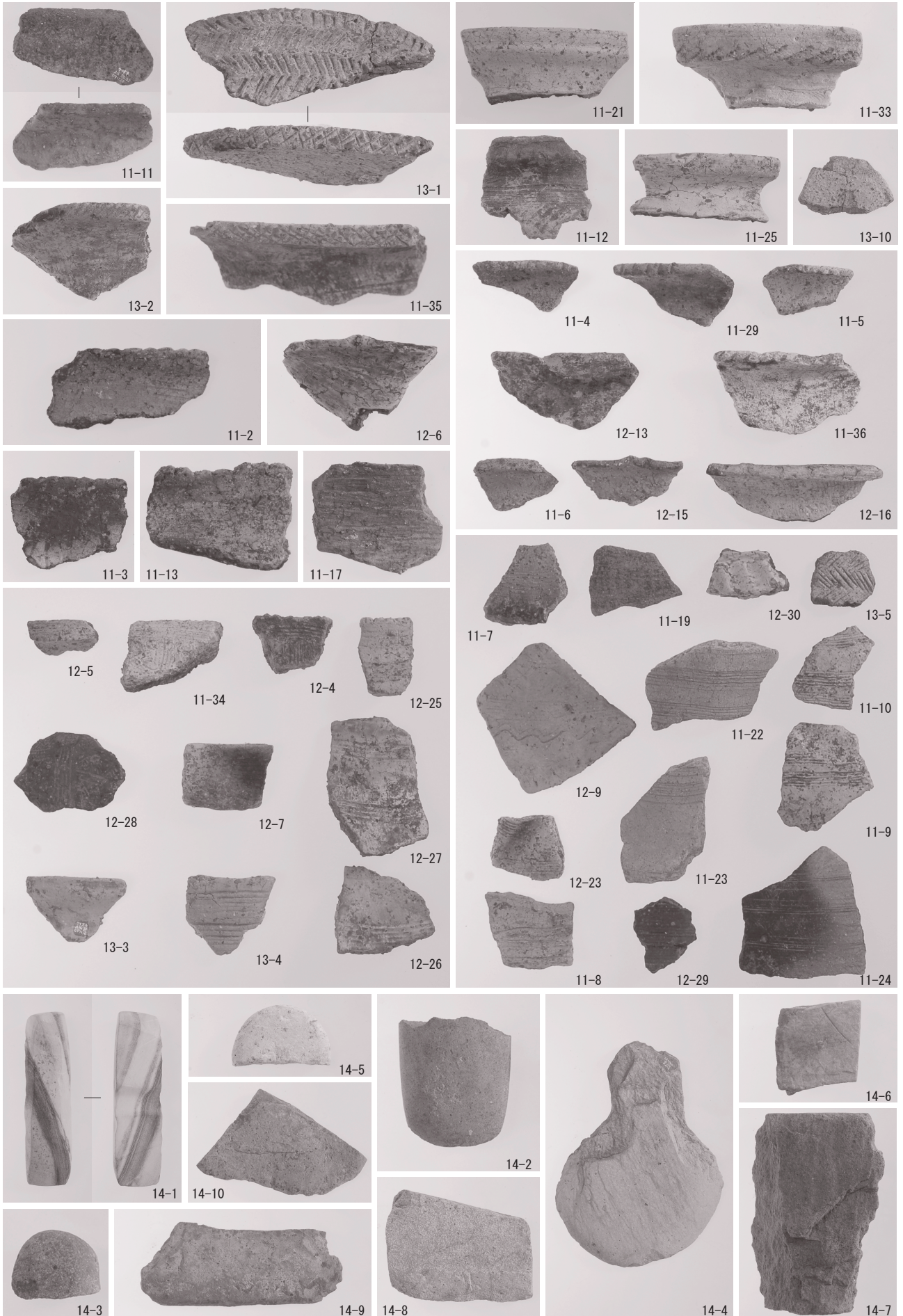
(5) SK08(東から)



(6) SK03土器出土状況(南から)



図版第四
遺物



報告書抄録

ふりがな	くそおきいせき							
書名	糞置遺跡							
副書名	主要地方道清水美山線道路改良工事に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第152集							
編著者名	野路昌嗣							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2014年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くそおきいせき 糞置遺跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 はんだちょう 半田町	18201	01181	36° 0′ 29″	136° 13′ 17″	20091006 ～ 20091225	2,300	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
糞置遺跡	集落	弥生時代 近世	土坑・溝・ピット 井戸・畝状遺構		弥生土器・石器 陶磁器など			
要約	糞置遺跡は、過去の調査において縄文時代晩期から弥生時代および古墳時代を通じて豊富な遺構・遺物が確認されている県下有数の遺跡である。今回の調査では、遺構・遺物は限定的であったものの、主に弥生時代中期中葉の集落が広がっていることを確認した。遺構では土坑墓、溝などが確認され、遺物では弥生時代中期の土器・石器が出土した。過去の調査成果と合わせ、今回の調査区は遺跡の北端部分にあたりと考えられる。							

福井県埋蔵文化財調査報告 第 152 集

糞置遺跡

－ 主要地方道清水美山線道路改良工事に伴う調査 －

平成26年 3月11日 印刷

平成26年 3月18日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 足羽印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町3丁目212
